
俺と僕と君は他人だ

アリタリタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と僕と君は他人だ

【Nコード】

N9007G

【作者名】

アリタリタ

【あらすじ】

「みなさん、ご存じですか？」なんて始まりでもなく、「愛は祈りだ」から始まるわけでもない。人はいつの間にか始まって、必ず終わる。一見そんな有限な時間の中で蒼井春は言う。「 を殺して」と。俺として」と。無限の時の中で蒼井秋は言う。「 を殺して」と。俺はその不可視の境界の中で言う。「了解」と。ジャンルに関しては、「推理」と言うのには微妙なので便宜上だと思ってくれればありがたいです。

1話

（ 1 : E N D , S T A E R T ）

宇宙に無なんて存在しない。

だから俺には有しかない。

それは、限りなく無に近い有だけれど、それはやはり有なんだ。

俺は、自分を見ていた。俺は自分を見下ろしていた。まるで俺は自分が俺ではない他人かのように見下していた。手術台の上の自分は紛れもなく死んでいたし、身下す俺は間違いなく生きていた。

二〇〇〇年、六月二十一日。十五歳なったばかりの夏に、俺は臨死体験をした。英語でいえば、ニア・デス・エクスペリエンスだっけ。カタカナ語の方が実感というものが無くてフィット感がある。それは体験したと言っても、ただの夢や妄想と同じような、脳内の化学反応に違いはないのだから。

だって俺は最近流行りのスピリチュアルやソウルなんてモノは信じないし、俺の前世が犬だったなんて言われても信じれるわけがない。だから、「体から魂が抜け出たんですよ」なんて思ってもいない。ニア・デス・エクスペリエンスと言えば、人間なんて「死んだら煙か土か食い物」になるって言った小説家がいたが、その通りだ。俺に言わせれば、人間に神秘性や超常な精神性を見出すのは、自分が人間であることを誇っている奴らだけだ。俺は人間には、いや生き物全てにそんな崇高な輝きは見出せない。

ただ、俺は自分の体験に驚異を感じていた。その異常な構図と映像に。自分のことを、ただ見下ろす俺。頭を巡る様々な映像。他人の所有物であるはずの記憶が頭の中を掻き乱す。

その時、俺は確実に自分が死ねばいいと思っている。いや、死んでもいいのだと思っている。そんな自分が恐ろしかった。

その時に感じた生と死の境界は限りなく薄かった。いや、無かったのかもしれない。まるでうたた寝をしているかのようなその時間を表現できるような言葉が見つからない。敢えて言葉に当てはめてしまふならば、疲れてベッドで眠る時のようなあやふやな眠気。直前まで近づいたその虚空の境界線はいつでも余りにも容易に超えられるようだった。そして、超えても何も変わらないのだと思った。

だからベッドの上であまりに短く睡眠から目を覚まして思った。「俺、二日も寝てたの？ 今日には二十二日じゃないの？」って。体が生きていても、心は死んでいることもある。それが生きていたことになるのかは分からないけど。

実際に植物状態の女性が何十年もの長い いや短い 眠りから目を覚まして自分はまだ二〇代の若い女だと思い込んでいた人がいるという。その話をテレビで見た時、俺は妙な親近感を感じた。自分の話をすれば、深夜の十一時に意識を失って三日後の朝七時に起きたから、間の二日間は心には存在していない時間だったのだ。

「あっ」と言う間もなかった。
体には存在していても、存在しない時間。

その時間は、無かったけれど、在った。

死んでいた（無かった）けれど、生きていた（在った）。

〈2：遭遇〉

偶然も必然も運命の内にある。

運命は結果論だから間違っことは無い。

だから運命は卑怯者だ。

俺の名前は不和冬真という。言い換えれば、僕は不和冬真という人間でもある。一言で自分を表現するとしたら、精神分裂症か、もしくは中途半端だと思う。前者に関して言えば、俺が病院で精神分裂症だと診断されて、家族から心配されているなんて意味ではない。病院の診断も無ければ、心配する家族もない。単なる下手で自己満足な比喩表現としての意味。なぜ、こんな言葉か、と言われれば、語感が好きというのもあるけれど、俺は本当に自分を表現している言葉だと思うからだ。口先で清く美しい言葉を並べて微笑みながら、心では醜悪で暗い絶望を見ているような人間。それが俺なんだと思う。偽善者であり偽悪者。そんな自分のせめぎ合いに流される俺は、中途半端なダメ人間だと思う。

俺はイメージ通りのサリンジャーよろしくの世捨て人のような生活に憧れている（彼は彼なりの人間関係はあつただろうけど）。それだけじゃなくて、孤独な一人旅に出たり、うまいコーヒーを出す喫茶店で毎日小説を読みながら暮らすのにも憧れている。将来客の来ない喫茶店のマスターになりたいとかも思っている。そんな社会的に廃人チックな生活がしたい。廃人なんて表現には語弊があるかもしれない。言うならば仙人暮らしのようなもの。世の喧騒から離れてヒキコモリになりたいだけ。

でも、そんな嫌世的な一方で、友達や恋人と一緒にいたいなんて願望もある。実はミィハーなんだ。今まで、築いてきたくだらない人間関係が捨てるのはあまりに名残惜しい。

あと、平凡でありきたりな日常も大嫌いだ。これからサラリーマンになって遮二無二働いてつまらない結婚でもして、子供に勉強とか礼儀なんかを教えるのだと思うと絶望しそうだ。老後まで想像できてしまうような「お決まり」人生は退屈極まりない。

それでも、俺は大学に通って、均質な労働力になるべく教養などを身につけることを止められない。いつか満足できる仕事をするんだろう、なんて淡い期待も持っている。

要するに、俺は中途半端なんだ。理想と現実のギャップなんてありきたりの表現は良くない。むしろ、ただの情性。気がつけば始まっていた生活が、緩やかな下り坂を転がるように勝手に落ちて行くような情性。それが俺の本質。気がつけば人並みの遊びと恋愛がある普通の生活を営み、しばしば小説や漫画のような非日常に逃げ込んだりする単なる凡庸。

そうやって、中途半端な俺が今も続いている。

そこには、愛着もあって、嫌悪もある。

そんな生活で、俺は虚無感こそ感じるが、満足感なんて全くない。幸いにも食い物も友達も女も十全に足りた生活が、俺の「何か」を満たしてくれない。「何か」なんて表現したけれど、「何か」が何なのか全く分からない。ただ単に時計の針のように代り映えのしない日常が繰り返す中で「何か」起こらないかな、なんて期待してるでも、そんな都合な展開は無いとも解っている。でも、期待している。大人ぶった現実くらい分かってる。

俺は本当に精神がまとまっていない。

俺は、俺であると同時に、俺ではないのだろう。

話を現在の時間軸に乗せようか。今日は二〇〇七年六月三〇日。今現在の天気は晴れ。夕方になると降水確率が高くなるらしい。

今年の四月から俺は大学二年生。大学に行かねばならないような世の中の雰囲気になされただけが、意外に大学生の生活は悪くない。自分の時間は十分にあるし、田舎を捨てて一人暮らしなので気が楽だ。大学はパラダイスと言うけれど……気が利かない言葉だ。もっと正確に表現するなら、「大学はパラダイスに憧れてる暇人たちの楽園」だ。

問題があるとすれば、大学生はとてつもなく暇だということだ。

これは由々しき問題だ！ 首相の漢字読み間違いよりは千倍、万倍、億倍も大問題だ！ 時間が余り過ぎている。暇なのに大学の授業は

自主的に休講になることが稀に……時々……頻繁にある。普通の大学生なら、暇な時間はサークル活動やバイトに精を出して有意義そうな大学生活を送っているのだろう。でも、酒もバイトも金にも興味の無い（一応、ある所で働いているが）俺には、暇を持て余すのが使命だった。

暇というのは、想像以上に恐ろしい。時間的な空白だけなら人は簡単に潰すことができる。寝てもいいのだし、カラオケで大声を張り上げてもいい。ボーリングで球を転がしてピンを倒して喜んでいればいい（余談だが、文にすると実に意味のないゲームに感じる）。しかし、実際の暇というのは精神的空白だ。これはかなり心を蝕む。余りに暇になると、自殺すら考えてしまう。突飛な思考に感じるかもしれない。でも、無駄に長い空っぽな時間が続くと、俺は自分が空っぽな人間だと再認識してしまう。起きて、飯を食べ、寝るだけの生物に覚えてしまう。生きている理由なんて本当に無いものなのだと思ってしまう。

今日も和さん^{なごみ}と言う知人のところに行くまでは完全完璧に暇だ。自由時間は少ない方が「自由」なんだつたりするんだよね。時計に目をやると、いつも忙しい時計の針は午後三時二十四分をさしている。時計の持ち主が、時計より暇だなんて笑えない話だ。

ドンドンドン。

突如、俺のアパートのドアが呼び声をあげた。

ドンドンドン。

呼び鈴を鳴らせ、呼び鈴を。

ドンドンドン。

ドアの外で「おい、いるんだろ開けるよ」と言う声がする。聞きなれた声。まったく、ドアの外で大声を上げるな。近所迷惑だ。しかも後で一番迷惑を被るのは俺だ。大家の婆さん、うるさいんだよ。まったく。

俺は気だるくゆつくりとドアの所に向う。

「なんだよ、うるせーな」

「不和、俺だ〜早く開けてくれ」

ガチャッとドアの鍵を開ける。そこにいたのは見慣れた顔と見慣れぬ顔だった。少し意表を突かれて心拍数が上昇した。

見慣れた顔は数少ない友人の緑川鉦みどりかね。ロンドン帰りの帰国子女だったそう、人懐っこく開放的な性格だ。開放的……なんてきれいな言葉は似つかわしくないな。むしろズケズケと他人に発言するし、言いたいことは止められない面倒な性格だ。帰国子女「開放的」という偏見もどうかと思うな。きつと、コイツが面倒なだけだ。一見、長身の金髪で関わりを持ちたくない雰囲気をもんもん充滿させているが、大学で知り合ってから気づいたら友人ということになっていった。髪の毛もさることながら、内面も異常に明るい。緑川と二人きりだと、時々ムカムカしてくることがある。それ程に明るい。言うなれば、油がのったカルビを食べ過ぎると、野菜が恋しくなるみたいな。……俺に文才は無いみたいだ。

それでも、なんだかんだで緑川と友人関係を保っていられるのは、緑川のサツパリとした性格に依るところが大きい。無礼だけど、豪快な男。西洋版の前田慶次郎だな（……文才が無いどころか、意味すら分らない）。でも、爽快な人間は付き合う上で心地がいいものだ。

「急にどうしたんだ」

「お前に客を連れて来た。なんか昨日のサークルの飲み会でお前のこと探してたみたいだから連れてきちゃった」

「連れてきちゃった」じゃねえよ！ 本当にこっちの都合はお構いなしだな。

「これから和さんとこ行くから、帰れ」

そう言っつて、ドアを閉めようとする、

「また和さんところかよ。ほんと和さんラブだな、お前！」

「ああ、そうだな。じゃあ、帰れ」

「冷たい！ 冷たすぎる！ 真夏に食べるガリガリしたイガグリ坊主のアイス並みだ！」

「ああ、そうだな。じゃあ、帰れ」

「うぐうぐ」

「うっわ、懐かしいな！ じゃあ、帰れ」

「構ってよ！ いじってよ！ なじってよ！」

「……なんか最後だけ意味違わないか？ ってか、最後のせいで二つ目まで怪しい意味に感じるぞ……」

「まあ、適当に書かれたツマラナイ会話はいいとして。お前を紹介してほしいって言うから連れて来たんだ！ 話くらいしろよ！ こんなかわいい子連れて来たんだから感謝して欲しいくらいだ！」

そう言われて、後ろに隠れているもう一人の人間に意識を向ける。女の子だ。ホントだ。かわいい。髪の毛は黒いショート。かわいい。服装は今時の大人びた女子大生って感じ。かわいい。黒いスキニーに白いシャツ。スタイルも悪くない。俺は細すぎるくらいの華奢な子が好きなんだ。かわいい。足が綺麗だ。かわいい。とりあえずかわいい。うぐん、知り合いではない。何か清楚な中に凜と通るものを感じる子だった。

ふと、まじまじと観察している自分に気づいて恥ずかしくなって目をあげる。やばい、六回もかわいって書いてちゃったよ……。この子がこの小説読んだらどうしよう……。まあ、ありえないけどね。最近、メタ的な冗談が流行り（？）だから書いてみただけ。

目をあげると、目が合った。ドキドキ。彼女の瞳はエスプレッソのように深い黒をしていた。この世の光をすべて飲み込みそうなほど黒くて深い瞳だった。

「どちら様？」

「蒼井春と言います。昨日、サークルの飲み会で会えるかと思って行ったんですけど。あたし、同じ大学で同じサークルなんで……」

ああ、サークルの子か。そういえば、サークルなんてもう1年以上顔を出してないな。大体、大学生がなぜあれほどまでに酒を好む

か理解できない。酒なんてただ体温が上がって口数が増えて思考が麻痺するぐらいの代物だろう。それなら、挽きたての豆をたっぷり使った一杯のコーヒーの方が満足感と悦を与えてくれる。

「ごめんね、覚えがない。で、なんの用？」

「立ち話もなんだから中に入れるよ」と緑川が言う。

「ああ、はいよ。どーぞどーぞ」

三人で部屋へと向かう。俺の部屋は五畳1K。でも、バルコニーは六畳！部屋より広い！さらに、JR中野駅まで徒歩一五分。コレで家賃は月三万円！安い！のか？東京の地価を考えたら安いはずだ。でも外観も内観も築二〇年木造の哀愁を漂わせている。女の子を連れてくるならデザイナーズマンションとかにすれば良かった……金ないから無理だけど。資本主義は世知辛い。家族と不仲な俺には親の脛をかじる齒が無いから自分で生計を立てなくてはならない。だから、こんなオンポロアパートでも高級物件だった。まあ、一つ理由をこじつけるなら、「ドラマの主人公は高級マンションよ、ポロアパートだろ？」って事かな。

部屋に入り、小さい丸いテーブルを三人で囲む。気まずい沈黙が流れる。

カチカチカチ。

緑川がそこらへんにあったボールペンをいじっている。

カチカチカチ。

時計を見ると四時五一分だった。時計の針の音まで聞こえる。

チツチツチツチ。

「コーヒー淹れてくるわ」

俺は、そう言っただけでキッチンに向かった。唐突に本音を言えば、女の子が苦手だった。正確に言えば、初対面の女の子が。同じ話題を共有していれば会話もできるが、初対面の相手だと何を話していいかわからなくなってくる。

女の子は飲みやすいのがいいのかな、と考えながらブラジルとコロンビアを半分ずつ少なめに入れコーヒーを淹れると、ふんわりと

した香りが広がった。今はコーヒートの香りだけがこの口下手な男心を癒してくれる。

「ミルクと砂糖は？」

「おれ砂糖一つで」

「あたしは、ミルクだけで」

テーブルに戻っても沈黙がそこにいた。無音ではない無音空間。

カチカチカチ。

チツチツチツチ。

安物のテーブルに付いた汚れが、一層目立つように感じる。沈黙を殺すように緑川はボールペンを小さいテーブルに荒々しく置いて、口を開いた。

「もう、早くしゃべれよ。なんだよ、この空気は」

その言葉は俺に向けられていた。間違いなく原因は連れてきた緑川なのに。男はいつも女性を優しくリズム良くリードする側なんてステレオタイプな感覚過ぎる！でも俺はコーヒートを一口飲み込み、口を開いた。

「それで、要件は？」

少し詰問するように言ってしまった。沈黙と緊張感知らぬ間に俺を苛立たせていた。イライラする自分に気づくと余計にイライラした。

「あの、サークルの合宿が七月二十日からあるんですけど、参加しないんですか？」

明らかに本題からずれた言葉だった。サークルの出欠なんて、わざわざ家まで訪ねたりするものじゃない。そもそも合宿の連絡すら来ていない。完全にフェイド・アウトした人間に連絡なんて送らない。大学の人間関係なんてそんな希薄なものだ。って言うか、そんなに話難い内容なのか？まさか、いきなり告白されたら好きになつてしまうかもしれない！「スキって言ったらどうします？」「愛します！」「……なんて、妄想するくらい健全な男児だよな？」

「あーね、参加しないよ。正直ああいうのは苦手なんだ。なんてい

うか、飲んでハシャいでみたいなノリって無理なんだ。それにサークルに馴染めてないから気まずいし。蒼井さんは参加するの？」さりげなく蒼井さんなんて呼んでしまったことすら気恥かしいのが男心。

「いえ、あたしもサークルに馴染めてないっていうか、輪の中に入れていないんで今回は不参加ですよ」

そういつて、彼女はニコツと笑った。とても愛らしい少女のような微笑みだった。なにか「かわいい」の一言で済ませるのが惜しいほど無垢な笑顔だった。でも、かわいい……。

話題を失って三人は再び口をつぐんだ。

俺はさつき見た笑顔を思い出していた。まるで人から愛されるためのような笑顔だった。俺はあんなに上手に笑えない。俺は自分が嫌いだから。

ふと気付くと、苛立っていた自分が消えていることに気が付いた。笑顔一つで心が緩むなんて我ながら情けない。時計の針は五時一分を指している。夕方もあと少しで終わる。

いつの間にか三つのコーヒーカップは空になっていた。

「コーヒーのお代わり持ってくるね」と言ってコーヒーメーカーにある残りのコーヒーをコップに注いだ。さつき淹れた時よりもいい香りがした。コップはすぐに薄く淹れたコーヒーで満たされた。

外で5時を知らせる『故郷』が流れて、家の時計は二分遅れているんだと発見した。

兎追いし かの山

小鮒釣りし かの川

夢は今も めぐりて

忘れがたき 故郷

大学生になってからまだ一度も帰っていない田舎の風景が浮かんでできてしまった。『故郷』に歌われるような遊びなんて現代っ子の

俺はしてないのに、つい田舎を連想してしまう。でも、決してホーム・シックなんて軟弱なものでは断じてない。俺がホーム・シックになる筈がない。だって、実家には両親と妹がいる。できることなら二度と顔を会わせずにいたいくらいだ。「忘れがたき」故郷ねえ……。

放送の『故郷』が止むと急に夏の空気が寒く感じられ、急ぎ立てられているような感じがした。また音が聞こえてきた。

ボーペンがカチカチカチ。

時計はチクタクチクタク。時計の音が大きく鳴り始める。

部屋の空気が、まるで真夏の夕立後のジメジメした冷たさのようだった。俺は言葉を慎重に並べた。緩んだ緊張の糸がドンドン引っ張られていく。

「それで、本当の要件は？ 興味のないようなサークルの話じゃなくでさ」

すると、彼女の眼が大きく開かれたような気がした。待っていたかのように目がこっちを向いた。子供のようなあどけない顔つきが、いつのまにかシニカルに冷笑を浮かべた大人のそれにならわっていた。血の気が引くのを感じた。血が全身の毛細血管から逃げていく。ぞわっ……。彼女はニヤつと口元を釣り上げる。そして心底嬉しそうに口を開いた。カチカチカ。

「美羽和さんから紹介されて来ました」

「そっか」と無意識に残念そうな声で言ってしまった。

「あー……そっちの人ね」

素敵だった平和でラブコメみたいな現実。グッバイ、俺のみくるちゃん。運命がそう来るなら仕方ない。俺は、立て板のように来る水はすべて受け流す。「事実は小説よりも奇なり」。おれの現在の

心境は、「現実とは小説より苦なり」。

世界のどこかで信号機が赤なのに人が飛び出して、事故が起きて人間が死んだ気がした。世界は死に溢れている。俺の中にも死が溢れている。みんな必死に抑え込んでいるんだ。忘れたり気に留めなかつたりして、死を抑え込んでいる。臭いものには蓋をする。でも、現実はいつでもどこでも残忍で凶悪だ。現実がなければ悲しさ、寂しさ、苦しさ……全てが無くなる。現実が無くなると楽しいこともなくなる？ そんなの安い代償だ！

それでも時計はチクタクチクタク。

く心と心

2人が帰ったあと、2つのコップを片付け、もう一杯だけ真つ黒いコーヒーを淹れた。バルコニー兼ベランダに出てドス黒いコーヒーを一口啜る。ああ、なんて綺麗な星空。今の状況が小説だったら真黒な雷雲が嵐の予感を告げているんじゃないか、と思った。

また一口コーヒーを啜る。俺は自嘲しするしかなかった。昔読んだ『青の炎』を思い出していた。主人公は妹を守るためにした殺人を悔いていない。はははっ。こんな時に、予定的にトリックがあり、犯行が露呈して終焉するミステリ小説世界に浸る自分と、洗濯を今日するか明日するかで悩んでいる現実的な自分とのギャップに笑いが止まらなくなった。完全に失敗するから完全犯罪なんだね、きつと。

口元は嬉しそうに笑えているだろうか。寝て起きたら学校でも行くこつかな。俺は逃避を始めた。現実的な自分に現実逃避することになるなんて。和さんのところへ行くのは明日でもいいや。和さんに携帯で連絡を入れた。

蒼井春のあの笑顔は 世界を冷笑するかの様な造り物は 美しかった。一度目の笑顔とは明らかに異質で完璧。俺には、どちらの笑顔が本物なのか分かる訳もない。きつと、どちらも本物。人は、一人であるけど、一人ではないんだ。和さんにメールを送信する。

「依頼人が来ましたよ。今度の仕事は重そうですね。」

2007年7月1日、雲は少しあるが晴れ。

朝6時に目が覚めた。大学生は寝る時間だ。目が覚めて適当に豆をブレンドしてコーヒーを淹れる。コーヒーの香りを嗅ぐと昨日の会話を思い出してしまった。

彼女は冷やかに言った。彼女は言葉の意味を理解しながら言ったんだ。

「美羽和さんから紹介されて来ました。」

もっと違う出会い方もあったのではないか？ いや、無かっただろうな。これは事実でしかない。神が造ったらしいこの憎たらしい世界は常に予定調和だから、運命に抗うことなんてできない。よくある美談で言う「運命に打ち勝つ」のなんて不可能だ。苦境に勝利することも運命の一部でしかない。運命は結果論だ。

俺は、緑川に「鉦、今すぐ帰れ。二人で話す。」と言いつた。

その時、彼女の眼尻は少し下がった。俺はそれを見ていた。その眼尻は、俺の拳動に満足しやがったんだ。緑川は文句を言いながら帰っていく。俺は緑川を見送ってドアの鍵をかける。

ガチャ。

さあ、密室の完成だ。部屋は世界から切り取られ、新たな世界の時間が始まる。時計に目を遣った。いつものようにチクタクチクタク。それでも、時間は新たに始まった。

「それで、依頼内容は？」

「私の父親を殺して。完璧に、でも偶然を装って。つまり事故ね。あなた達にはそれができるでしょ？」

無機質な表情のまま彼女はそう言った。まるで、計算ドリルを解く大人のようなだった。自分が言っている事の意味を理解しながらも、平然と言い放つ。

「なぜ父親を壊したいの？」

と聞くと、彼女の顔が曇った。予定外の展開に目を細めている。

「なぜ？ 理由を聞くの？ 理由なんか必要？」

「いや、絶対必要ではないけど。でも、殺人レベルの依頼は理由を聞いておきたい。俺たちも、冷酷な殺し屋とかじゃない。単なる何

でも屋だ。感情ぐらいいは持つてる」

彼女は時計にチラッと目を送ると、

「そっか。じゃあ、話が長くなるから別の機会に」と言った。

「ああ。それと、次は和さんの所にしてくれ。俺は、日常と非日常が溶け合うのが嫌いだ。俺の生活に入り込んでくることは許さない」
彼女は明らかにもどかしそだった。まるで遅いエレベーターを待つようにどうしようもなさそうに苛立っていた。いや、焦っていたのかもしれない。しかし、目がまるで別人のように穏やかになっていた。

なんだこの違和感は？

「わかりました。じゃあ後日に伺います」

急に敬語になった。それがさらなる違和感を俺にもたらす。彼女は黙り込んだ。穏やかな顔で。そして穏やかな目で。

俺は人が人を殺す理由を箇条書きに頭に並べながら、眼前の女を冷静に見つめていた。今までの経験上、殺人の動機なんて限りなく際限なく多くあるようで、実はごく僅かしかないものだ。大抵は、金とか男女関係とか辱めを受けたとか虐待とか、くだらない人間のどうでもいい理由しかない。稀に社会に絶望したとかで無差別に殺人するキテレツな輩がいるが。

人はいつでも人を殺せる。物理的に、そして精神的に。

どこからか「アタシモウカエリマス」と聞こえた。何か言った？

俺は「えっ？」と反射して返す。

「あたしもう帰りますね。じゃあ、また。」

そう言って彼女は帰って行った。他には何も告げずに。二杯目のコーヒーには手も付けていなかった。コップにたっぷりと残ったコーヒーを見ながら小声で「面倒だからまたが無いことを願っております。」と言ってみた。きつと、希望は裏切られるんだろうけど。

だって、この世は。

いつまでも昨夜の事ばかり考えてもいられないので、今日の授業の準備をして家を出た。朝八時。外は夏を全身に教え込んでくれるような暑さだった。まだ朝八時なのに、こんな暑いなんて地球はどうかしてしまったのか？ きつと、宇宙が人間に嫌がらせをして宇宙から追い出そうとしているに違いない。

家を出て、サラリーマンやOLの群れに紛れ込む。それぞれの世界を生きる人が、同じ空間を目指して足を動かす。機械のように。

授業は午後からだだが、こんなに早く家を出るのは、常連になっている喫茶店に行くためだ。薄暗くて古びた喫茶店には他の客もいない。錆びついたドアは軋んで俺を出迎えてくれる。看板の赤サビの装飾がいい味を出している。いつもそこで読書をしながらコーヒーを飲んで学校に行く。安っぽいミステリの文庫本を広げ、ページを捲ってはコーヒーを胃に流しこむ。最高の贅沢だ。

今日もコーヒーを一口啜り、ポケットからタバコを取り出し、火を付ける。「人間はなんで生きてんだよ」とか「もし地球外の生命体がいいたら、生きてて楽しいか聞いてみたい」とか勝手極まる思考をしてみると意外に楽しくなってくる。そんな身勝手な問題は学校の勉強とは異なり、なぜか心を動かす。

気だるいタバコの煙が額を撫でて天へ向かって行く。

煙を目で追って上を見上げると、天井に非常に小さな窓があるのに気づいた。小さな鳥が一羽泊まっている。

「マスター、なんであそこに窓あるの？ 全然光入ってないし」

そう言うと、マスターは目を細めて懐かしそうな、安心したような顔をした。心なしかマスターが最近太ったような印象を受けた。そして、洗ったばかりのコップを拭きながら、マスターは言った。

「昔、あそこから妻が鳥にエサをあげていたんだ。でも、妻が死んだから一回も開けたことがないんだよ。鳥たちにも妻が死んだことを知らせないといけないからね。今ではあの子しか来なくなつた

よ」

「マスターが代わりにエサをあげればいいんじゃない？」

と不意に口走った。何気ない言葉は別の人にはナイフのように鋭利な刃物だった。マスターの表情は強張っていた。蓄えた白髪混じりの髭はマスターの心を隠しているようだった。そこにいるマスターは今までに見たことのない別の人間だった。強張ったマスターの持つコップはきつと悲鳴をあげている。

自分が別の世界に踏み込んだのを感じた。

その瞬間、昨日訪ねてきた蒼井春の顔がふと頭をよぎった。

「妻はね……妻は孤独だったんだよ。親も死んでいたし、兄弟姉妹もいなかった。親戚関係も希薄で妻の葬式にも誰も来なかった。妻には友人もいなかった。ただ、ここに立ち寄る鳥たちだけが妻の話し相手だった。人間の価値は死んだ時に泣いてくれる人の数だとよく言うだろう？　じゃあ、私の妻の人生は価値がない存在だったのかい？　鳥たちは泣けない。だから代わりに飢餓の苦しみを与えてやるんだ。妻の死を知らせるために」

マスターは自分が熱くなってしまったと感じたのか、急に下を俯きコップを置いた。そして水を出して手を清めるように洗った。それを終わると反省しているかのような元気のない声を漏らした。

「きつと理解できないだろうね。でも、所詮人間の考えなんて他人に理解できるものじゃない。私は妻が死んだ時、涙を流せなかった。むしろホッとした。その時は喜びすら感じた。足が悪いから車椅子生活で、こここの二階から出ることもできない妻はいつも鳥を通して外を見ていた。以前は自由に当たり前にそこに存在していた外という世界を妻は失った。外があると知っていながら自分の世界は家の二階だけ。妻はきつと死にたかつたんだよ。でも、死ねなかった。誰だって死ぬのは怖い。それに人間から未練が無くなる事はない。妻がそう思っているんだという想像に過ぎないのだけど、私にはそうしか思えなかった。私はそんな妻を見ていられなかった。だから、自分の妻なのに死んでくれてホッとしたんだ」

俺は一言も声をかけることができなかった。何と云えばいいかも分からないし、その時々マスターの気持ちを理解することもできない。だって、長年一緒にいた妻の気持ちすら分からないのに、まして俺がマスターを理解することなんて。

俺には反則技が無い訳ではないが、そこまでする必要はない。今の俺に理解できるのは、マスターは妻の死に対して安心を感じ、そのことに対して後ろめたい気持ちを持っているのじゃないかな、という漠然とした雰囲気だけだ。マスターの本音は後ろめたいという素振りで自分を正当化しようというものかもしれない。または、マスターは罪悪感を持つことで妻への想いを維持しようとしているのかもしれない。

なんだって可能性はある　それは何だっていい。

地雷は世界中に、そして無数に埋まっている。踏めば足が消え、安定が消える。だから、意識的にしろ無意識的にしろマスターの表面に現れた事実を受け止め、そして、事態を収束へと向かわせることのみを考えた。平穩は素晴らしい。

「奥さんの気持ちも、マスターと奥さんの関係も僕にはわかりません。でも、死にたいと思っている人もいますし、人に死んでほしいと思っっている人だって確実にいます。問題はマスターがどう思っっているか、その自分に対して自分がどう感じているかだと思えます。だから僕に言えることはなさそうです」

詭弁だ。大体が本音で一部が嘘だった。嘘というより単なる解答のごまかしだ。正直他人はあくまで他人だし、俺には無関係な世界だ。他人の罪悪感を一緒に背負うほど俺の心は強くない。「自分には解答はありませんよ」だから「あなたの解答は自分で探してくださいね」。

それなのに。

昨日、蒼井春が依頼に来た時、俺は咄嗟に理由を聞いてしまった。今までの依頼では、大体和さんが依頼内容について確認して、俺は働くだけだった。俺の考えは必要なかった。今まで、俺と依頼人が

こんな形で話をする機会なんてなかった。単なる気まぐれか、それとも何かの意図があつてか、和さんは先に俺と会わせた。

俺は、自分から他人の世界に入りたいとは思わない。むしろ入りたくない。なぜかを無理にでも理由づけするならば、他人に興味がないからだろう。興味とは、とても曖昧なことだ。他人の気持ちを知りたいという好奇心はある。それは人間の本質なのかもしれない。分からないから知りたい。それは、知的好奇心に近い。知らない知識への渴望は誰にでもあるものだから。

しかし、ここで言う興味は別次元の話だ。それは、他人の人生など自分には無関係だとう核心でもある。理由は簡単だ。だって、自分の人生が無意味なのだから。

蒼井春の言葉を、本心を、原因を、どうしても聞いておきたかった。なぜ、蒼井の世界に入ろうとしてしまったのだろう。単に殺人を依頼する人間の精神をみたかっただけかもしれない。暗くて居心地の悪い世界に、わざわざ自ら足を突っ込む必要なんて無いのに。単純な好奇心に似た衝動の結果は、分かっている。知ることが世界に踏み込むことに類似する。知ることに関わることなのだから。

長居して考えたかったがマスターとの関係も微妙に気マズイ。僅かな時間が、今の雰囲気を作ってしまった。

俺はコーヒー代四五〇円をぴったり払ってそそくさとその場から逃げ出した。

店の外に出ると、昼前の太陽が明るく街を照らしていた。

3和

暑い夏の昼どき、大学前の並木道には学生さんが行列をなしていた。ふといつか見た蟻の雑学テレビ番組を思い出した。

はたらきアリさんは、女王アリさんのためにせっせと、せっせと、せっせと、せっせとはたります。女王アリさんは生まれたときから決まっただけで、子供を産むことに集中します。

俺はその蟻の大名行列に参加した。今日3限の『哲学A』へ足を黙々と動かす。今日の授業は実存主義についてのお話だ。

隣で緑川が寝息を立てている。きつと卑猥な夢を見ているに違いない。俺は真面目に授業を受ける。だって、テストが怖いんだもん。大学生は単位と墮落の天秤が何よりも重要だ。要領よくソツなくこなす。これが賢い大学生。

教授に目をやると、白髪の御老体は黒板に呪文を書き始めた。きつと教科書も持たずに寝ている学生にザラキを唱えているんだ。それとも、このボケ老人は魔法陣でも書いて生徒をグルグルさせようとしているのか？ まあ、何でもいいが、大学の教授は授業に対するスタンスが高校とは根本的に異なる。もはや、授業という一つの単語でまとめて良いものか疑問さえ残る。大学のお偉い先生は、特に一般教養の先生は、教室があれば授業が可能だ。そこに生徒は要らない。この白髪のいかにも教授らしいジイ様は、黒板とベタベタ、イチャイチャして生徒には一瞥もくれない。だから真面目に授業受けるって言っても、暇潰しに教科書を読むぐらいだ。

サルトル大先生は「実存は本質に先立つ」という素敵な名言を残している。足りない俺の脳で簡単に言えば、神によって人間の本質が決定されるのではなく、人は自分で自分を創ることができるのだという事だろう。

しかし、いつたい自分の本質は何なのかという問いに即答できる者がこの世にどれほどいるだろうか。この味気ない現代社会だからこそ一人の大学生として声を大にして叫ぼう！ 「神様俺は何者かを決めてくれ」って。

江戸時代の人だったら、自分が何者かなんて疑問に思わないのだろうか。生まれたときから自分が農民や武士だと決められ、生き方を決められていたんだから、自分が何者かで悩むより、雨やお金で悩んでたのかもしれない（全部自分勝手な妄想だろうけれど）。

現代はリアリティが溢れているのに、現実感が無い。と言っても、俺が現代の全てを生きている訳でも、俺が万人と同じ感覚を共有している訳でもないから、個人的な意見だが。

それでも俺は、現代ほどリアリティがある時代も無いと思う。例えば、ほとんどの（特に日本）人が、神の存在を疑っている。

いや、否定さえしている。ほとんどが科学的に説明ができないという理由で。本来的な神は存在しえないと言った方が良いかもしれない。神が神たる由縁が、多数の人々が持つ神への畏敬の念だとするなら、神はもう存在しえない。観測できないんだから。今では、ペストも雷も噴火も、自然科学の一部になり下がったのだから。かつては人知を超えていた神様は、今では人の知性によつて否定されている。なんたる皮肉だろう。人間は、自分で創った万能な神様を超えちゃったんだ。

生活にもリアリティが遍在している。より富を効率的に分配する経済学に基づき生産された家や家具。幸せを万人に解るように解説した雑誌。産地や生産者の名前まで分かる食べ物。万物が人の知識の中に収まろうと、分かりやすく論理的に分析、解説される。理解できないモノなんてこの世に存在しないという錯覚すら覚えてしまう。

でも、この世には現実感が全く無い。現実感って言うのは、俺が実際に関係している感覚とでも言おうかな。精神的に物事に触れている感覚と言っても良いかもしれない。確かに、世界はリアルに見

える。何にでも分かり易い理由が付いていて、意義も見出せる。けれど、現実感がないのは、自分が自分であることに実感が無いからだ。

俺には生きる理由がなかった。この理由には二つの意味合いがある。一つは俺が生きている原因、もう一つは俺が生きる目的だ。今でも二つとも無い。せめて言わせてもらおうなら、コーヒーとタバコくらいが目的だ。とても安っぽい。俺には理由がない。だから生きていてもしょうがない。でも終わらせる勇気も思い切りもない。生きていれば何かいいことがあるだろうなんて期待も持ってる。それに、生の価値を探したいとも思う。ひどく単純な論理。まだ死ぬないから生きる。生きるから生きる目的が要る。でも、目的が見つからない。

生きていて楽しいと思うことくらいある。小学校のころはカン蹴りやドツチボールが楽しかった。中学校では読書とゲームとバスケットに熱中した。高校ではバンドを組んで音楽に浸っていた。うまい飯を食べれば嬉しいし美味しい。無数に楽しいことなんてある。それこそ無限に。列挙した自分が馬鹿に思えるくらい無数に。

だが、その刹那的な、そして断続的な高揚感、興奮、快感、全てが無に帰すと俺は知っている。友達とテレビゲームや少年漫画に熱中していても、夜は机で計算問題や漢字ドリルで黙々と作業をしている。今までコップに満ちていたコーヒーはいつか空になってしまっただと知ってしまった。

十五歳の時、目が覚めて、二日間も自分の心が死んでいたことに気が付いたあの白いベッドの上で、今まで自問してきた問いに答えを出した。

「自分には何の価値があるのか？」

「何も無い」

何も無いあの空白の体験を認識した時、世界は色を失った。

だから俺の頭にいつも、それはある。それは言うてはいけない言葉だ。全世界を、人間を、自分を、あなたを、全否定する言葉だ。

でも、それはいつも頭にあるんだ。頭の中で思考に干渉し、行動を規制してくるんだ。

「世界なんて所詮は暇つぶしの道具でしかない」

授業が終わって俺は次の『財務会計』の授業をサボって和さんの所に出かけた。

美羽和、年齢三十歳（会話から推測）。和さんは「和」なんていう和やかな名前をしながら、和やかならざる新宿区歌舞伎町の外れでおよそ適法とは思えない臨床心理士をしている。というか、たぶん違法だ。名は体を表さない。和さんの診クリニックはただの平凡なマンションだ。東京を歩けば見つかるマンションといえるくらい普通の、さほど高級でもないマンションだ。六階建の灰色マンションの三階に看板もなしに営業している。一応、形としての表札は出ているが、「碇ユイ」……もう、駄目だ、この人。偽名だし、新世紀だ。『エヴァンゲリオン』が大好きなんだね。俺も大好き。

こんな怪しい場所だけれど、一応客はいる。ワケアリの客だけだけれど。潔癖症やヒステリーなどの神経症に始まり、大麻精神病や失語症の人もいる。和さんは確かに強権的でも大雑把で話しやすく誰にでも好印象を与える美人なので人気が出たのかもしれない。腕は実際に経験ことも診察・治療に同席したこともないし、俺には浅い心理学的な知識しかないから判断できない。

実は和さんには裏の顔がある。まあ、どちらが裏か俺にはわからないが、その裏の顔こそが今日俺が和さんを訪ねてきた理由だ。和さんの裏の顔は、ありきたりな言葉で言えば「なんでも屋」もしくは「請負人」。和さんはこの請負人とかなんでも屋という名前が嫌いらしいから、「暇人」だと自称している。

請け負うことが大抵は殺人や救命など生命レベルの問題から映画とかの裏社会によくありがちな金や暴力の問題を扱うプロフェッシ

ヨナルだ。つまり、兼業してる専門家。なんにもつまってないけど他人の問題に首を突っ込んで、詮索したり解決したりして「遊んで」帰る。和さん曰く、「泥棒からネコ探しまで」やる気らしい。泥棒と猫の間に詰め込みたいだけ詰め込んでるね。チヨコボールのオマケ缶みたいな「暇人」だこと！

俺はある特性のために時々和さんの仕事の手伝いをしている。どういう経緯で働くことになったかは後述としよう。

クリニックの中に入ると、白衣姿の和さんがいた。和さんは休業日でも白衣でいる姿をよく見かける。白衣にときめいてしまう俺には最高の労働条件だ。女医さんサイコー！ ナースサイコー！ ……失敬。長く綺麗な黒色の髪と真つ黒な服の上に白衣を着て、男のように強いタバコの煙をたてている。和さんは豪快な笑顔と共に話を始めた。なんて素敵なお女性だろう。

「おう。一週間ぐらいぶりだな。そーいや女の客とはもう会ったんだな。ちよつと知り合いの関係でウチに来た子なんだよ。適当に同じ大学の不和冬真を探せつて言つていた」

相変わらず適当な人だ。

「メールでも送りましたが、昨日会いました。いきなり自宅に来たんですよ。しかも陽気な男連れで。なんで俺に回したんですか？」

「悪い悪い。彼女の下調べとかで一週間ほど留守にしていたから、なかなか時間がなくてそつちに送っちゃった。テヘツ」

テヘツじゃねえ！ 俺を蒼井と会わせた理由を、真剣に考えていたのに……。少し複雑かと思わせようと思つてたのに……。

「テヘツとか自分で言わないでください。ホントかわいい人だな。好きになっちゃいますよ。全然悪いと思つてないですね。まあ、いいですけど」

「もうこの上なく愛しているだろ、あたしのこと。それに、あたしは上司。お前は従者。絶対服従だろ？」

ニヤツと笑いながら色っぽい仕草をする和さん。うん。好き。

「普通は上司と部下ですけどね」

「それより、先週の女子高生軽音バンドのアニメ見たか？」

「当然」

「黒いのがかわい〜よなあ〜もう。かわい〜よな〜。バンド始めようかな〜」

「アンタがかわいいわ！」

「影響受けるの早すぎです。それに和さんの歳じゃあ文化祭とか出れないじゃないですか」

「死んじゃえ（ハート）！」

「死んじゃう（デッド）！」

「ちなみにデッドは過去系だからな。中学生レベルの英語だぞ。L a z y って言われてもしかたないぞ」

「微妙にエンディングとかかけるのやめてください。全然うまくないですから」

じゃれ合うような軽快で心潤う会話だったが、急に和さんはタバコを一息吸って遮った。ふうつと煙を吐き出す。そして急に真剣な顔になって煙を見つめる様にして会話を再開させた。

「もう詳細は聞いたのか？」

「いや、まだほんの触り程度です。詳細は後日会った時に話すということでした。後日がいつになるかも分かりませんが」

「そっか。私から先に説明してもいいけどどうする？」

これには少し悩んだ。知ることは抜け出せなくなる危険性を孕んでいる。でも、先に聞いてしまった方が、後で会った時は楽だろう。どうせ会うことになるだろうし、それに先に聞いたところで大きな問題でもないだろう。

「先に聞いておきます。何か少し感じる場所もあつたので」

「そっか。じゃあ重複する事もあるけど、説明するぞ。私も一回電話で話しただけなんだがな。彼女は蒼井秋。神奈川県横浜市出身の早立大学2年生。お前、同級生だろ？ あと、よく目にする都市銀

行の重役の娘だ。兄弟、姉妹はない。現在は世田谷区砧に住んでいる。依頼は母親の事故と見せかけた殺害。期限は特別定めていないが早急にとの事。手段は問わないから確実に、だそうだ」

「ちょ、ちよつと待ってください。それ誰ですか？ 昨日ウチに来たのは蒼井春と名乗りましたけど、姉妹はいないんですか？ それと依頼内容についても父親の殺害だと言っていました。話がメチャクチャじゃないですか」

二人して怪訝そうな表情になった。しかし、こういった商売上、情報に虚偽があるのはよくあることだ。大抵は事前調査で露呈するような事ばかりだけど。

もつとも頻繁にあるのは、名前を偽った依頼だ。はっきり言って違法行為だらけの依頼ばかりだから、自分のプライベートな情報は明かしたくないのも頷ける。面倒事には嘘をついて自分を隠すのが保身の始めの一步だからね。

だが、今回は依頼内容が違う。これは珍しい、というか初めてだ。依頼内容が違うということは依頼の目的も違うはずだ。結果によって手段が変わるのだから。つまり、蒼井秋と蒼井春は別人ということになる。だが、和さんの調査結果では蒼井秋に兄弟・姉妹はいないことになっている。つまり、考えられうる状況は三通りぐらいか。一つは蒼井秋と蒼井秋には戸籍上の関係がないが何かしらの、例えば血縁などの関係がある。二つ目は、依頼内容は本当の目的には関係が全くなく、何か別に真の目的がある。最後に、一番厄介なのは、二人が同一人物である場合だ。同一人物内での人格と利害関係の不一致。二つ存在する人格が別々の目的のために行動している場合、なんでも屋としてはどうに対応したらいいのか？

俺の怪訝そうな顔つきを見て察したのか、和さんはニコニコしながら、

「たぶん一番面白そうなのが正解だよ。」

と言った。この人は最高だ。究極のノンバーバル・コミュニケーションの使い手ってやつ？ 　しかし、蒼井春と秋が二重人格だと言

い放つ根拠が解らなかつた。俺は何うように和さんの顔を見る。

すると、「わかつてるよ」と言う表情を浮かべた和さんは続けた。この人読心術でも使えるのか？

「ウチに訪ねてきた時に気になつた事なんだが、その蒼井つて子は記憶に断層があるんだよ。二重人格つていうのは、正確には解離性同一性障害の一種なんだ。この障害の特徴は、本来一つずつ、お前や私にある記憶や感覚や意識なんか、一個体に複数しかも独立して存在するつてことだ。この場合で言えば、自分が春という意識や自我と、秋であるという意識や自我が蒼井という一人の女の子の中に共存してて、しかも、それぞれが別々に意識と自我を持ち、別々に考え、別々に記憶しているんだ。つまり、片方が覚醒している状態なら片方は睡眠状態にあるようなもんだよ。私が、蒼井秋と会つた時、身の上話をしてくれたんだが、彼女は明らかに異常な程に過去の記憶を欠落していた。十歳くらいまでの記憶がほとんど無いなんて事普通じゃ考えられないだろ？ 予想に過ぎないんだが、おそらく十歳までの蒼井秋の記憶と意識を全て背負つて、蒼井春という彼女が誕生したんだと思われる。それに、一度意識が飛んで白昼夢でも見ているかのような態度をとつたんだ。態度や眼つきが完全に別人だつたよ。これは典型的な症状だよ。この発生原因とメカニズムの解明はまだ完全には為されていないが、幼少期に受けた心的外傷、つまりトラウマが関係していると一般に考えられているな。十歳のあたしの美少女に何があつたんだか……」

「記憶が欠落？ もしそうだつたら自分で異変に気がつくじゃないですか」

「そつでもないんだよ。例えば、記憶喪失の人は自分が記憶を喪失しているという事に気がつかない。だって、無いんだから。無いことは、有つたことを知らなければ発見できないだろ？ まして彼女の人格が別になつてしまえば、初めから無かつたんだ。いや、私たちがすれば無かつたのだからうけど、彼女からすれば無いなんて言葉さえ受け付けない」

蒼井の別人のような態度には俺も心当たりがあった。父親を殺して欲しいと言う蒼井に理由を聞いた時や笑った時の、あのえも言われぬ違和感だ。それは些細な変化に敏感すぎただけかもしれない。でも、何かの現実を映し出す変化だったのではないか？ ただの勘ぐりに過ぎなくても十分に意識するに値する違和感だと思えた。

「でも、彼女がその解離性障害だとしたら依頼はどうするんですか？ 断るんですか？ 両方の親を殺しちゃったら、依頼の十分条件ですけど必要条件ではないですよ。」

「いや、今回は受けようと思う。そんなに死ぬほど大変そうな仕事でもなさそうだし、楽しそうだし！ 暇だしな！ それに、お嬢様だから報酬もいいんだぞ」

暇だから人を殺してたら、人類は明日には滅亡しますね。警察も暇人を逮捕しなきゃ。「お前暇だろ？ じゃあ逮捕な」みたいなファンキーな時代が到来しますよ。人殺しが楽しい仕事だなんて勘弁してくださいよ、まったく。大変そうでもないだつて？ 和さんが「楽しそう」って言って大変じゃかったことなんてないぞ？

でも、たぶん和さんには俺が和さんの態度を不審に思っていることが筒抜けなのだろう。だって、ニヤニヤしてるもん。俺は言葉を冗談めかして、笑った。

「結局世の中は金ですか！ マネーイズマネーね。まあ、和さんがそう言うなら俺はいいですけど、一応今度蒼井さんと会うまでは受けるか保留にして置いてください」

「オーケー！ わかった。いつ会う予定なの？」

「わかりません。たぶん、向こうから連絡が来ると思います。また、直接家に来たりするかもしれないね」

俺は、笑いながら言った。

でもね、冗談は現実になると冗談ではなくなるんだよ。

和さんのクリニックを出て大学に戻ると、教室には緑川と三言がいた。霧谷きりたに三言みことはジーンズにTシャツが似合う女の子で、いつも場の雰囲気明るくしてくれるから好きだった。裕福な家庭に生まれ、たらし、まるで売れないアイドルのように服やアクセサリーを買うし、夜は高そうなレストランで食事をしている。ブルジョワの子はブルジョアってやつ。でも、そんなブルジョワジーな彼女でも、俺なんかと分け隔てなく接してくれる。金持ちの道楽という感じもない。気さくな明るい女の子だ。ってというか、金持ちだからって高慢ちきで鼻につくような奴は滅多にお目にかかれない気もするが。彼女の鮮やかな栗色の髪の毛は猫の毛よりも柔らかそうだった。

彼女の鮮やかな栗色の髪の毛は猫の毛よりも柔らかそうだった。髪も性格もふわふわしている。まるで、小春日和の軽井沢みたいな奴。例えばが下手だな……。そう！ 言ってみるなら、カレーに入ってる福神づけ！ ……俺の文才の無さに絶望しそうだ。

「おす」と俺が言うと二人はさっきまで二人でしてた会話をいきなり振ってきた。

「西尾維新はやっぱり『サイコロジカル』が最高つすよね〜！」

マシユマロ三言は必死そうな表情で語り始めた。すると、緑川も応酬する。

「なにいつてんだよ。『クビキリサイクル』だろ。あれは、最後の哀川さんも最高にクールだし、三つ子のメイドさんの内、てる子ちゃん一人だけ名前が異色だったから何か犯人と関りがあるのか悩まされたぜ。あかり、ひかり、てる子だぜ？ なんとか子つてところが怪しかったよ！」

おいおい、そこかよ。しかもハチャメチャな妄言だな。しかも、哀川さんとか最後まで最後じゃねーか。確かに西尾維新の魅力の一つはキャラの個性が強いところだけだな。そこは納得。この世界にもああいふ強烈なキャラクターが何人かいれば、綺麗な表紙の小説みたいな世界になるのになあ。

「まあ、実際『クビキリサイクル』も『サイコロジカル』も好きだ

けど、俺はやっぱ、『化物語』が好きだな。あれは会話のテンポが凄まじいよ。俺には絶対書けないわ」

すると、緑川も三言も一緒にこっちの方を見て声を揃えて言った。

「ありやりやぎさんがウケたね」

確かにあそこまで徹底するとは思わなかったよ。でももう、止めてくれ。いちいち突っ込む気持ちにもなれない。それに『化物語』知らないヤツがいたら読むの止めてしまっじゃんか！

「妙な連携見せなくていいから。そういえば三言、今日家に来るっていつてたっけ？ 何時ぐらいに来るの？」

「ええっ！ 大学から一緒に行くつもりだったのに！ ダメな感じっすか？」

「別にいいけど、じゃあもう帰ろうか。途中で、コーヒー豆買ってもいい？」

「いいですよ。あたしブルーマウンテンがいいです！」

「ふざけんな！ 大学生は金が無いから大学生なんだよ。知ってる豆を言えばいいと思ってるな？ それに、もう買っ豆はマンデリンって決めてるんだよね。いいから、早く行くぞ。じゃあ、緑川またな」

「ああ、じゃあまた明後日にでも。明日の出席は任せたぞ！」

代返ぐらいしてやるが、最近の大学は厳しいんだぞ？ 二回も出席を取ったりするんだから。先週やられたんだよ……作者が。

ざわざわしている大学のラウンジを出て緑川と別れて、俺は三言と家に向かって歩き出した。日が西に傾いて一日の終わりを促していた。

「こうして二人で歩いてると、カップルみたいですね。世の寂しい者どもに見せ付けてやりましょ！ ウィーアーカポー！」

そう言っ腕を絡めて寄りかかってくる。本当にお約束なやつだな。まるで平安京の貴族みたいな奴だ。三言の朝は毎日衣が露に濡れて大変だろう。そう言えば、先週の夢に俺が出てきたとか言ってたな。おれは、断じてお前のために「きみにより 思ひならひぬ

世の中の人はこれをや 恋といふらむ」なんて言わないぞ。勘違いすんな！ 全部妄想だ……勘違いしてるのは俺か。まあ、三言は一緒にいて楽しいし、会話の弾む奴だから一応お約束で合わせてやるか。

「三言……お前結構胸すごいな」

すると三言は爽やかに、そして左目でウインクしながら言い放った。「惚れんなよ！」

ヤバイ。ちよつと、ドキツとした。ヤバイ。俺は惚れたのか？

ヤバイ。恋に落ちたのか？まさかマジで恋する5秒前？

「ちよつと触つてええか？ ここがええのんか？」

「お代官様〜あ〜れ〜」

お代官様ごっこをしていると、三言は嬉しそうに笑っている。いや、決して変態的な意味じゃなくて、三言は純粹に他の人と戯れるのが好きなんだ。人が好きなんだ。

「三言……お前結構乳首すごいな」

すると三言は爽やかに、そして左目でウインクしながら言い放った。「惚れんなよ！」

ヤバイ。ちよつと、ドキツとした。ヤバイ。俺は乳首に惚れたのか？ ヤバイ。恋に落ちたのか？ まさかマジで変態5秒後？

「ちよつと触つてええか？ ここがええのんか？」

「お代官様〜あ〜れ〜」

なんか書いていて馬鹿らしくなってきた。

「三言って本当にバカ話するのが好きなんだな。まあ、俺も三言と話すのは好きだけど」

「うん、好きだよ。冬真と話すのはそんな中でも上位に食い込めるね。だって、クールぶってるくせにアホなんだもん」

「アホって言うなよ。関西人か、お前は！ 三言にこんな愛されると緑川に嫉妬されて殺されそうだ。まあ、三十五まで生きて独身だったら嫁に貰ってやるぞ？」

「ええ〜。あたしもその時には三十五歳なんだよ？ もっと早く貰

って！ はあと！」

「ハートとか記号を読むなよ。まあ、考えておいてやるよ！ カッコ笑い！」

自分たち以外の人間には意味のない会話。その無意味な会話は、ひどく心地が良かった。そして意味の無い不毛で軽快な会話は絶えず続き、家に着くまで途切れなかった。

オンボロアパートの玄関は真っ黒で、今日は一段と鮮やかで深く感じた。不味いコーヒーを出すお洒落気取りの喫茶店のような扉だ。

古びた木造の階段をゆっくり登る。

ギシギシギシギシ。

木造の階段が悲鳴をあげる。すると急に地区放送の『故郷』が流れた。最近よく聞くな。ちゃんと家に帰ってるからかな。

カシャッ。

あれ？

ボロアパートの二階にある俺の部屋は鍵が開いていた。出る時ちゃんと閉めたはずなのに。軋むドアを引く

ギィッギィッ。

あなただつたら自分の目を信じるのだろうか、常識を信じるのだろうか？ いや、常識なんて日常を彩る路上の花みたいなもんだ。気にしなければ、誰も気がつかない。常識的な事なんて非常識だと思つた時にしか意識しない。

そこに、俺の狭く苦しい部屋に、テーブルの横に、蒼井春が微笑んでいた。その顔は穏やかで、何よりも自然だった。

二十一年前、男の子は生まれた。働き者の父と家庭的な母、二人の兄に囲まれて男の子は幸せそうに育った。近所の人も頭のいい子だと持てはやす。でも、ごく平凡な運動能力と無口な性格は男の子を目立たない小学生にするには十分だった。いや、むしろ目立つ必要を感じない男の子は、ひっそりと身を潜めていた。

小学校三年生の初春、男の子は自分で自分に出して問いかけた。

ぼくはだれ？

答えは返って来なかった。男の子には空の返事が「わからないの？」って言っているように聞こえた。

わからないとイケナイ？

またも返事は返って来なかった。だが男の子には「当たり前じゃないか。みんな分かっているんだぞ？」と聞こえた。男の子は頭を抱え、搾り出すように聞いた。

ぼくはだれじゃないの？

男の子には解っていた。僕が僕であるには、僕が僕以外の誰とも違う存在でなければならぬことに。周囲の人間は既に僕とは違っていた。背格好も、テストの点も家庭の経済状況も。それでも、僕はみんなと違うのに僕はみんなと同じだった。軽微な違いなど、同じであることと同意だった。毎朝学校に通い、昨夜嫌々に作業した宿題を出し、椅子に座り公式を覚える。体育着を着て運動をして汗を流す。僕は誰でも無くして、誰とも違わない。

中学校に上がると俺と周囲との違いは広がった。けれど、結果は同じことだった。社会や自分に不満があっても一応は満足していたつもりだ。単に不平不満を漏らす人たちとは違うはずだった。俺に

も社会への適応能力が付いて、友達もできたし好きな子もできた。よく講釈をたれる頭でつかちなガキにすらなっていた。

しかし、俺は俺の存在を自認できないままだった。俺はただの中学生で、みんなと同じように受験をして就職をして、働き疲れて灰になる。中学三年の修学旅行の前日、団体行動の栞を読みながら小学生の頃のように呟いた。

俺は誰なんだ？

虚しい静けさに締め付けられた。昔もこんなが事あったなと振り返る。昔とは何か違う。見せかけばかりが異なっていく。でも、本質は同じだ。俺は知識を付け、経験を重ねた。論理の鎧は柔らかく頑丈でいつも排他的だ。でも、他は自分でもあるのだ。

僕は周りとう違うの？

髪の毛を染め、ピアスを開けたこともあった。ガラスを割って職員室で正座もした。そうしてみんなと違うんだと、自分に色を塗った。だけど、俺は俺であって、俺でなかった。画用紙も紙、艶やかに色を塗った紙もただの紙。子供の落書きもただの紙。レンブラントが描いても紙は紙だ。

俺は、世界から認められる天才でもなければ、社会からはみ出さずほど異人でもなかった。社会や世界にありふれた凡庸、平凡、凡人、普通の全てに当てはまった。どんぐりの様な背丈の俺が背伸びをしても他人と自分は区別できなかった。

そんな平凡を絵に書いたような俺の修学旅行5日目、交通事故に遭って病院に運ばれた。修学旅行は奈良・京都を一週間で巡る予定だった。今時、奈良・京都かと落胆する輩もいたが、俺には京都は

いつ見ても新鮮だった。現代的で享乐的な歓楽街を一つ曲がると、喧騒を嫌い静寂が流れる寺社、仏閣、軒並みがある。そんな矛盾した落差が美しく感じた。美しく感じたのは共感していたのだ。自分と自分の落差に。

清水の舞台から京都タワーと京都の街並みを眺め長寿の水を飲んで、いざ自由行動になると思った直後、俺は轢かれた。情けないことに清水坂を下りた所の駐車上で車に轢かれた。フェアレディーZに轢かれた。長寿の水なんて効果が全然ねえ！

しかも、和さんに轢かれた！

それが美羽和さんとの出会いだった。いや正確には、運命的に出会ったのは和さんのフェアレディーと俺の脚だけど。Zが俺の脚の関節を一つ増やしてやろうと激しいキスをしてきたんだ！ その激しさで俺の脚はふにやふにやになっちまった！

轢かれた瞬間には、「え？」っとしか思えなかった。事は俺のいないところで起きたような気さえしていた。異常な痛みは脳内がシヤットアウトしてくれるらしい。人間の体はウマイことできている。

気がつく俺は宙に浮いていた。自分を見下ろしている俺には不思議なことに轢かれた記憶があった。そして、手術中に何故かずっと俺が子供のころの記憶や父親の若いころの記憶を見た。それは映像だったり匂いだったり非常にリアルだった。まるで実際に現実を俯瞰してやるような遠くて近い感覚。それは脳内でする実体験だった。術後に意識不明の自分の肉体周辺には椅子も花も無かった。俺たちは二人きりだった。肉体だけの自分と、心だけの俺。自分自身との邂逅は一瞬のように感じられた。俺の体は自分の体がどこにあるのか分かっていないかの様に、ウロウロしている。

「俺はどこにいる？」

その一瞬に俺は確実に「もう、このまま死んでくれ」と思っていた。俺なんて死んでも構わない。生きてることが自分の無意味さを

感じる遠因であり、根本であると分かっていたのだ。だが、自分の肉体は必死に死に抗っていた。生きたいと心臓を動かし続け、血液を体全身に流し続けていた。

二日後に俺は意識を回復した。真白い壁と真白いカーテンと白い蛍光灯と、真白い人間たちを認識した。誰かが呼んだ白衣の医者が「ペンの先を見てください」と言っ、ボールペンの先端を目で追うと医者は「もう大丈夫ですよ。ヨカッタデスネ!」と言った。

白い服を着た母に、俺が二日ずっと寝ていたことを聞かされて、「ああ、そっか。修学旅行も終わったんだ」と呟いた。母は、「周囲には気を配りなさい」と教科書通りのセリフを吐いて、父と帰って行った。

その日の夜、真白な暗闇の中で呆けていると、ドアがガラツと開いて、一人の女性が入ってきた。そして、その侵入者は、

「意識戻ったんだね。ヨカッタヨカッタ。私は美羽和。轢いちゃって悪かったね。ごめんね」

と、悪びれもせず、まるで瑣末な事かのように笑った。まるで、厄介事が勝手に解決してくれたのを喜ぶように。

和さんが白々しい謝罪を言った後、俺は半分本気で、イヤミを言っ、てやった。周囲が挨拶のように「ヨカッタ」と言っ、たが、本当に助かって良かったと実感できなかつ、た。

「死ねなかつ、たのは残念ですけど、一応あなたのためにも生きていた方が都合がいいですよね」

「そうだねえ。ヨカッタヨ。死なれると色々面倒だからさ」

和さんはニコニコしていた。その屈託のない素直な笑顔は俺の神経を逆なで、全身の毛が逆立つような感覚に襲われた。

「随分ニヤニヤしてますね。人を殺しかけたのに、あなたは罪悪感すら感じていないですね」

和さんは聖母マリアのようなこれ以上ない微笑みを浮かべて「うん」と言っ、た。

「だって、死にたがってるのに勇気が無くて死ねないような人を、死ぬ覚悟もせずに殺してあげられたら、むしろ人助けだよ。君、最初に言ったの結構本心でしょ？ 死ななくてよかったのは、私にとつてよかつたんだよ」

俺は衝撃を受けた。ナンダコイツ！ さっきまで抱いていた嫌悪感や拒否感が一変して、好意すら抱いていた。この人の人生をサツパリと斬り捨てる発言はなぜか心地よかった。親近感を感じていたのかもしれない。社会とは確実に完全に異次元にいる存在への憧れのようなものかもしれない。彼女の世界と俺の世界は圧倒的に違う。俺は初対面の彼女に聞いた。

「あなたが生きている理由って何ですか？ 今回のことで死ねば終わりだつてことが実感できましたよ。死んだら終わりなのになんて人は生きるんですかね？ 自分が何者かも解らずに生きていくのは俺には拷問に近いですよ」

彼女は息を殺して笑い始めた。ふふふつ、と。

「理由なんて無いよ。全ての物や生き物は死ぬ運命にある。死ぬことを決定する遺伝子さえ存在する。死は受け継がれてるんだから、人は受け取りを拒否できない。地球でさえもいつかは死ぬ。終点が死んだから生きる目的なんてないんだよ。終点が無ければ目的も無い。目的が無ければ手段も無い。手段はつまり生き方つてことかな。」

でもさ、解答が無いってことは間違いもないってことだぜ？ 最高じゃんか！ うざい教師やお偉い学者とかにバツを貰わなくて済むんだから。百点満点が最初っから決まったテストなんて最高じゃん。あとは、紙に答えを書くだけ」

俺は更なる衝撃を受けた。衝撃？ いや、革命とか進化とか天変地異と言った方がいいのかも知れない。他の人が聞いたら「なんて

単純だ」と馬鹿にするかも知れないが、俺には核爆弾級に威力があった。今までの俺は自分は社会の中に無数にある一個の人間に過ぎないと思っていた。俺の代替はいくらでもあるし、俺は何者でもないと思っていた。だから、自分の人生は無価値で死と生は等価だとしても、この人は生が無価値だからこそ最高の価値があるだと言った。はつきり言って肯定できない。ゼンゼン、ワカラナイ。だが、自分の理解不能な論理を持つ人間の存在は新鮮な衝撃だった。俺はこの人の一生を見ていたいと真剣に思った。

それは純粹な好奇心、そして人生の暇つぶしへの欲求。

おれは、和さんに魅了され、支配されたような心境だった。

そのあと和さんは裏の仕事の話や身の上話をしてくれた。実際問題として、違法な仕事を気安く他人に喋るなと思うが、俺は和さんの仕事の手伝をしたいと思うようになっていた。それは和さんを見続けるために必要だった。殺人や暴力を含む和さんの仕事に好感を持てる訳ではない。はつきり言って最悪だろう。でも、近くで見えていたかった。まじまじと観察したかった。

「仕事に加えてくれ」とさりげなく頼んでみた。和さんは「ダメ」と即答した。

それでも俺はすがり付いた。頭を下げ懇願し続けた。ゲームを欲しがる子供のように。

「頼まれてもヤダよ。足手まといだし、邪魔なだけだ」

そう来ると思ったよ。だから自分を売り込まなくちゃな。このご時世、就職も簡単じゃない。就職氷河期に勉強もしない作者はきつと段ボールハウスで雨と戦う勇者になるだろう。でも、俺は違う。だから、自己アピール・タイムだ。子供は自分の愛らしさを売って愛を手にするなら、大人はメリットや能力を売りさばく。

「俺の意識が吹っ飛んでる時に、たぶん輸血した母親のものだと思っただけで、自分の小さな時の映像とか若い父親の映像を見たんですよ。俺と母親二人きりの記憶もあつたんで、たぶん母親の記憶

だと思っんですけど」

和さんは少し怪訝そうな顔をして、

「……それって、血液を通して他人の記憶が見えるってこと？」

俺は和さんが興味を持った手ごたえを感じた。

「たぶん、そうなりますね。はつきりとは分らないですけど」と得意そうに言つと、

「オーケー！ 採用しよ」

早っ！ たぶんどんな優秀な経営者より早い判断だ！ 少しは悩め！

「ケガが治つたらここへ連絡しな。まだ、確かめることもあるし、君の能力についてもどんな能力か実験しなくちゃだから試験採用な」と言つて名刺を出すと和さんは帰って行った。なんて、現金な人だ！ サツパリし過ぎな和さん！ 愛してる！

そんな和さんと再会するのはその半年後のことになった。

5は(4の一部)

半年後、中学三年の冬に和さんと再会すると、俺たちは何回も実験を繰り返した。受験もあるのに、受験に必要なを感じない俺は連日連夜、和さんの元へ訪ねて行った。他人の血液を輸血したり、輸血量を変化させたり、血液を嘗めてみたり、逆に他人に輸血してみたり、様々な醜態で気持ち悪い実験を行った。和さんと共に。そういう実験を一年ほど繰り返しやっと自分に起きている現象が見えてきた。

・血された血液の提供者が最も新しく覚えた記憶や思い出した記憶を受け取る。

・条件、血液型による輸血条件の制約を受ける。

・一〇ミリリットルの血液で採決から三〇分前の記憶が経験可能。

予定調和的で運命的で偶然は必然であるこの世界で、偶然にも俺の血液型はRh + ABなので全人口の中で八割程度の人間の血液を受容できる。AB型は抗原を持たないため、受容する分にはAでもBでもOでも一応は大丈夫だ。

どんなに安全でも、さすがに他人の血液を、つまりは他人自身を自分の体に入れるのは気分が良くないため、俺は和さんと話し合っ
て輸血は一回につき一〇ミリリットルまでと決めた。一〇ミリリットルで三〇分。上出来だろう。

見える記憶量は血量に対し二次関数的に増加する。理論上は二〇
ミリリットルで一二〇分。関数に直せば、輸血量×ミリリットルに
対して時間y分は、

$$y \parallel 3 / 10 \times 2$$

となる。帰納的な一般式なので、誤差も起こりうるし、yの上限は解らないが必要もないだろう。手術の時は母から相当な量の輸血を受けたから、幼い俺の映像も見えたに違いない。

いつだったか、俺は和さんに「なんで血液で過去の記憶が見えるんですかね。血なんて極論から言えば、ただの酸素や栄養を全身に廻らせるための液体でしょ？」記憶って何者なんですか？」って質問した。本当に、素朴な疑問をぶつただけだった。

和さんは、「確かに、所謂ところの科学的に説明するのは難しいな」と前置きを置いてこんな話をしてくれた。

「よく解らんが……血液つてモノは、西洋科学的に言えば人間の臓器の一種なんだよ。必要な酸素や栄養素から不要な二酸化炭素などまでを運搬する。いわば、体内の運び屋だ。だから、人にとって非常に重要な欠くことのできない要素なんだよ。でも、記憶とは直接的に関係してはいない。記憶つてのは様々な種類があるが、この場合、重要なのは五感が記憶の始まりだったことだ。

まず五感が周囲の変化や状態を知覚する。ありとあらゆる情報を知覚する。正確にはこの時点では情報と言うより、単なる感覚なのだが。そして、脳がこの感覚情報を取捨選択する。つまり、必要ないと無意識的に消滅させられるんだ。冬真がここに来るまでにすれ違った車のナンバーなんて覚えてないだろ？ そんな様なものだよ」

「つまり、覚えてない感覚は自分に必要ないってことですか？」

「いいや、違うな。必要ないって判断は意図的に操作するのは難しい。そんな事ができたら世の中みんなテストで百点ばっかりの最悪な世界になっちまうだろ？ そんな世界だったら、あたしは教科書に落書きして世の中の事実を改竄して回るよ。アリテイに言えば、その判断は意識の水面下で行われるんだ。自分の知らない自分が勝手に決めちゃうんだよ。なんか凄く自分が情けなくなる話だけど」

「自分が思い通りにならないなんて、記憶に限った話じゃないですよ。タバコだって、止めたいのに止められないですから」

「まあ、その通りだ。まあ、あたしはタバコ止める気ないけどな。」

話を元に戻すと、その近くした感覚情報は短期記憶として保持されることになる。保持って言うてもたかが一分程度だ。一秒持たない事もあり得る。そこで次に現れるのが、理解ってステップだ。これが第二ステージ。感覚に過ぎない情報を理解する。よくわからないかも知れないけど、お湯は熱いつて理解するみたいなものだ。温かいからお湯だとか、そんな議論は無しだぞ。とりあえずの例え話だ。そういつた理解を経て記憶は、中期記憶として脳内の海馬つてところに蓄積される。名前ぐらいは聞いたことあるだろ？ 最近、テレビとかでもよく耳にするから。

でも、これで終わらないから面倒だよ。中期記憶も次第に忘却される。無限じゃないんだ。時間と伴に風化する。でもな、何かしらのキツカケがあつて、記憶を追想したり反復すると、その中期記憶は重要なモノと判断されて側頭葉に長期記憶として永遠に保持されるんだよ。まあ、永遠つてのは語弊があるけど、長期記憶は失われないとも言われているからな」

俺は、話半分で聞いていた。中期記憶あたりから、俺の足りない脳味噌は限界を迎えたらしい。我ながら諦めの早い脳味噌だ。でも、記憶のうんちくは分かつて、俺の異変の解答は得られない。なぜ、俺が人の記憶を見ることができるのか。そして、なぜ血液が媒体なのか。全然わからなかった。

「じゃあ、何で血液と直接的に関係を持たない血が俺に他人の記憶を見せるんですか？」

「うん……と考え込む和さん。」

「わからん。全くもってわからん。」

この人にも分からないことがあるのだとホツとしてしまう。

「ってか、今までの話はなんだつたんだ？」

「ただ、一つ言えるのは、血液は今までに言つたような記憶の活動を行う器官にも連絡しているつてことだ。血液は、全身を巡る。だから、私たちのことを最もよく知っているのは血液かもしれない。もちろん、比喻にもならない言葉上の遊びで言えばな」

結局は、原因不明という結論だ。解らなくてもいいじゃないか！

何はともあれ、俺は和さんの手伝いを始めた。本格的に開始したのは高校二年の終わりからだ。最初の依頼は浮気をしている夫と浮気相手への復讐だった。あれはスカツとしたし、後味もよかった。なにより、血を入れずに済んだ。やっぱ、他人と混ざるのは気持ち悪い。

目的達成まで俺の出番は殆ど無かったが、会社に侵入してパソコンを荒らし夫の帰る時間を遅れさせ、浮気相手の携帯を拝借して夫に「今夜七時に新宿アルタ前で」とメールを入れた。事前調査で、夜七時に新宿が定番の浮気デートコースの始まりなのは知ってたもんね！そしてそこに打ち合わせどおり探偵に変装した和さん登場！浮気の証拠写真で夫を強請り、後日三〇万ほど巻き上げて奥さんに渡す。そして浮気相手には夫の携帯から誹謗中傷・罵詈雑言を発信して精神的ダメージを与え、浮気相手のパソコンにあった時間をかけて作成したであろうプレゼン用ファイルを削除。これで依頼完了！

ただ嫌がらせをするだけで五万の売上ですわ！奥さんも三〇万も臨時お小遣いできて、さぞ満足だろう。

仕事といえば大体こんな単純で馬鹿げた仕事だった。

でも、今回の、蒼井家の仕事はいつも違う。こういう謎への高揚感は久々だ。こんな億劫な依頼も久々。殺人の依頼だし、相手も二重人格の可能性がある。俺にはこの事件が収束して拡散していくとす黒い暗闇の中で、捻じれて絡まっていくような不安を抱いていた。きつと、和さんも興味本位で仕事を受けたに違いない。あの人はほとんど気分で仕事をしている。結果だけは保証されているが。

不安に周囲を囲まれた俺は、蒼井春も秋も畏怖の対象として見て

いた。未知の事への恐れを抱いた。どうに事態が流転していくかという不安と、蒼井自身の未知の本質に抱いた恐れだった。

6 環

時間を戻そう。だから、今日は七月二日の夕刻時。

出会ったばかりの美しい女の子は俺の部屋で笑っていた。鮮やかにキュートに。

なんで？　なんで？　なんで？　なんで？

頭の中は三文字しか浮かばない。少し時間が経ってやっと違う疑問がいくつも湧いてきた。

「なんでいるんだよ！」

「どうやって入った！」

「なんのつもりだ！」

俺は立て続けに怒鳴った。三言は目を丸くして事態を納得しようとしていた。だが、無理に決まってる。三言は何も知らない。俺の仕事のことも蒼井依頼のことも。

「今すぐ帰れ！」

俺は激昂して怒鳴った。「勝手に人の世界に入るな」、俺は自分の領域に土足で、しかも不意に入られたことが許せなかった。だが、選択の余地はない。不法侵入して、家主の帰りを待つような奴が「帰れ」で帰るなんてありえない。俺はまた怒りに任せて三言に怒鳴った。

「三言！　今すぐ帰れ」

「えっ？　なんで？　あたし居ちゃマズいんですか？　どーして？」

三言の目には僅かに光るものが見て取れた。今まで軽口を叩いていた隣の人が、突如怒りを露わにして怒鳴ってきたのだから、無理もない。三言に落ち度もないのだから、混乱して当然だ。本当に三言に申し訳も無いが、どうしても巻き込む訳にはいかなかった。特にコッチの世界だけには。

三言は世界を愛している。今の世界を。俺の見る世界と三言の見る世界は同じだけ違う。それは、三言は納豆が大嫌いで、俺は

納豆が大好きなのと同じこと。そんなレベルの話。

「いいから。帰れよ。また後で連絡するから」と、強引に三言を帰らせ鍵を閉める。

ガチャッ。

やっと心が落ち着いてきた。ごめんな、三言。怒ってはいけない。クールになれ。外でうるさく鳴いている『故郷』が終わろうとしている。さあ、密室になった。これが俺の世界だ。この失礼にも程がある美少女をどう調理してやろうか。

俺は薄暗いキッチン兼廊下を抜け明るい部屋に向かった。ドカッと腰を床にぶつけて、蒼井の顔を睨みつける。

「そんな顔をしないでよ。今日は訳あって急に来ちゃったんだ。悪いとは思ってるんだよ。だから許してよ」

あまりに気さくな言葉に今までの恐怖やら怒りやらが居場所を失って脳内で暴れていた。どうしていいか分からなかった。人の怒りは本来、不条理に向けられる。健全で善良な青年が轢き逃げに遭うとか、救急車で妊婦がたらい回しにされるとか、そう言う不条理に。今の状況は不条理か否かすら理解できなかった。完全なる意味不明。人は、本当に訳がわからない物には不安や疑問しか抱けない。

だから俺の感情は、もはや恐怖・怒りではなくただの疑問になっていた。なぜ家にきた？

蒼井は本当にすまなそうな顔をしていた。その表情から悪意は読み取れない。本当に悪いと思っているのだろう。

確かに、蒼井には三言を巻き込む理由もない。そもそも三言のこととは知らないだろう。ただ偶然の事故だったのかもしれない。それでも、三言に知られる事は嫌だった。それこそ不条理だ。

「訳って何だ？」

と聞き返す。まあ、納得できる理由なんてあるわけがない。あるもんか！ 女の子を泣かしてしまったんだぞ？ っていうか、それは

俺の自己制御が足りないからか？ いや、でも原因の原因はコイツに間違いがない！ だから、蒼井の不可解の行動には必然的な理由が欲しかった。「しかたない」と納得したかった。

「うーん、なんかわからないけど家出してきちゃった（笑）。他にいくところ無くって。気づいたら君のところ向かってたんだよね！」
「（笑）じゃねーよ。訳なんか無いんじゃないか！ こっちは依頼を受けて仕事をするだけ。ビジネスライクな関係なんだ。それなのに請け負う側の私生活に首をつっこむな！ あんたは俺のあっちの世界にはいない存在なんだよ」

釘を刺して置かないと繰り返す可能性があるからきつく言い放つ。異常な程執拗になっている自分がいた。さらに念を押しておく。「二度と来るな」口で言っただけ分るような楽な相手ではないのだろうけど。

「じゃあさ、今日から一緒に暮らそうよ！ そうだね！ そうしよう！」

……はい？ 意味不明だし、訳分かんないし、訳不明だし、意味分かんなかった。「一緒に暮らす」？ 誰が誰と？ 「じゃあ」ってなんでだ？ 俺の理解力不足か。行間を読めって言っただけ。OK！ 目を前に戻して行間を読みなおそう。

やっぱりね。そりゃそうなるよ さっぱりわからんわ。

「何言ってるの？ 正気？」

「もちろんだよ！ だって家帰れないんだもん。どうせ寂しい男の一人暮らしなんだし、いいでしょ？」

勝手に寂しくするな。彼女ならイッパイいるぞ！ パソコンの中だけ。っていうか、そんな事じゃなくて。

「なんで家に帰れないんだよ。男の一人暮らしだからこそダメだよ。帰れないっていうか、今日からお母さんが家出しちゃったから家にも孤独なんだよね。一人なんて寂しいじゃんか。だから、今回は完全プライベートのお泊りごっこだね！ いやん、恥ずかしい！」

なに言ってやがるんだ。もう訳分からぬ。会話を返す気力すら湧かない。お母さんが家出？ それなら搜索しろよ。探す気もないのか！ それと、娘まで家出すんな。

三言は「お泊りごっこ」と言った。昔、田舎で近所の友達とよくやった鬼ごっこ。ごっこ遊びはただの真似ごとだ。真実じゃない。何かになりたい願望が人にはある。俺だって三言のようになりたいでも、所詮真似ごとだ。

深読みのし過ぎかもしれないが、言葉は人間の無意識や近況を表さずには存在できないと思う。寂しいと言う蒼井の心に少し同感してしまったのかもしれない。そんな俺は蒼井に対して興味を抱いてしまったのだろうか。つまりは、俺も寂しいのだろうか。

まあ、今時の男子大学生たる俺には、かわいい女が泊まりに来るのに断る理由はない。って言うか、断わる訳がない。人生なんて面白くて興味が持てれば何でもいいんだ。だから受け入れる。当たり前だ！

二人とも、もう何も詮索しない。二人とも依頼や核心には敢えて触れるなんて無粋なことはしない。「それでいい。これでいい」と思った。なぜかは解らないけれど。

虚像の中にも真実は存在する。光は凸レンズを通して真逆に収束してスクリーンに実像を写す。今の二人の関係にスクリーンは存在しない。ただ、二人は同じ空間を共有するだけ。世界も次元も全く違う空間を共有するだけ。現実というレンズは二人の虚像を拡大している。現実が真実を見せつける。だから、敢えて二人は現実に、いや核心に触れるような真似はしない。目は見るためでなく、背けるために動かせるんだ。

今は「それでいい。これでいい」。レンズを隔てている蒼井の姿は、レンズの向こうにいる俺に映ってはいないだろう。

なにもしてないが、こうして俺は蒼井春と一緒に暮らす事となった。と言うか、お泊りごっこを始めた。ペルソナを被った共同生活劇の始まり始まり。

奈々和

俺と春は毎日一緒に遊びまわった。大学なんて知らない。大学？それっておいしいの？一応期末テストは受けたけどね。享樂的に生きているのが現代っ子な大学生だ。来る日も来る日も東京の街をぶらぶらして回った。浅草寺や東京タワー、お台場にも行った。決して普段では行かないような所ばかりを巡った。

二〇〇七年、七月二十八日。じめじめした曇り。

例の如く俺と春は高田馬場のエクセシオールで甘い甘いロイヤル・ミルクティを飲みながら今日の予定を話していた。

「今日ナンジャタウン行こうよ！ 餃子食おうぜ、餃子！」

「池袋サンシャインにはこの前行ったじゃんか。それより秋葉行ってメイド喫茶行こう！」

「やだよ。秋葉遠いじゃん。それに、メイドの格好ならいつも家でしてあげてるじゃん！」

春はワザと大きな声で周りに聞こえるように言った。してねえよ！ 誤解されるだろ。俺は変態亭主関白かよ。コウセツ様も現代の亭主関白にはビックリだわ！ 俺のレベル的には、まだアブノーマル大納言くらいだと思っぞ。

結局、春にツツパリで押し切られて土俵から落ちた俺は、渋谷と池袋ナンジャタウンに行った。駅を降りるとゴミ集積場のように人がいた。俺は粗大ゴミ。春は資源ごみ。リサイクルには回さない。人ゴミの中には輝く新品の家電製品もいるのかな？

目的地に向かう途中で、ケンタッキーのオリジナルチキンを食べながら人間観察をした。

「私たちって、本当に生きていてもしょうがないね。」
「さらりと自虐する。自虐もここまで来ると哀れだ。田山花袋とか日本自然主義の作家のように過剰に自分を辱めることで保身に成功するような奴らとは違う。俺だって電車の中で綺麗で色っぽい姉さん

に釘付けになってジロジロ見てしまう。ストーカーまではしないけど。でも、そんなの普通のことなんだよ。生きてれば他人と比べておかしいところなんて幾らでも列挙できる。

春が言うのはそんなことじゃない。自分の異常さなんて、ありふれている。異常じゃない人間は、世界で最も異常だ。花袋が守った「自分」を自己否定する。「自分」の人生への無価値感。自分の代用がどこかにいるのではないかと言う自身の虚無感。生きることの無価値さへの焦燥感だ。恐らくほとんどの人間が感じているんじゃない？

「生きててもしょうがないのに、目的もないのに、今飯を食ってるのが不思議」

「ぎゃあああくん。ヴええああああん。」

突然隣の席にいた若い女性の子供が泣き始めた。その子供は二歳くらいだろう。幼子は、店全体に自分の不快を文句を投げつけるように絶叫した。

うるさい、けど心地いい。矛盾した感覚って、このことだ。世界が自分中心に回っていた頃のこの爽快さや全ての人間から愛され大切にされる優越感を、世間にぶちまける。この子はまだ何も知らない。

「いつから子供じゃなくなったのかな？」

不意に春に聞いてみた。

「子供と大人に境界線なんてないんですよ。親にとっては子供は永遠に子供だし、成人式を迎えれば法的には大人です。人は大人と子供のレッテルを両方貼られてるんだと思いますよ。ある場面では子供でも、ある場面では大人っていう状況が自分がどちらに属するか分からなくするんですよ」

「模範解答だね。俺が教授だったら優あげちゃうかも。でもさ、やつぱり人には大人と子供の区別ってあると思うんだよね。俺自身にも子供の時と今って決定的に絶対的に違う部分があるんだよ。漠然とした、でも絶対な違いが」

子供を静めるべく猫などで声で語りかけるお母さんの女性を見つめる春の顔は入れたてのミルクココアのように温かかった。他人を思いやる目だった。

俺は急に居たたまれなくなって冷めたコーヒーを飲みほし、「もう行こうか」と促した。そのあと、ゲームセンターとカラオケで体力と満腹感を潰して餃子を食べた。体力も食欲もすぐに元に戻る。しかし、時間は確実に過ぎていく。たとえ無駄な時間であっても。

二〇〇七年八月十日。俺と春は相変わらず自堕落な生活を送っている。「働いたら負けかな」と思っているわけではないけど、やっぱり自堕落な生活は楽だ。でも今日は違う。和さんから緊急の呼び出しがあったのだ。相変わらずの短文メールで「今日午後一時に家に来い」と命令が入った。唐突過ぎる！ しかも是非は問わない。やっぱりこの人は今だに自分が世界の中心なのだろう。きつと、世界を創造し給うた神様の所有物たるこの世の中に、和さんは勝手に自分の領土を作って他の土地に侵入して遊んで帰ってくるんだ。世界は自分のもの。最高ですよ、和さん。もつと子供のように奔放に遊ぶところを見せてくれ。

朝十一時に起きて寝ている春を尻目に、支度を整えて出発する。春が中にある部屋のドアに鍵をする。「行ってきます」と小声で囁き、出勤途中のサラリーマンの波に逆らって和さんの元へと足を動かす。さあ、今日は久々の非日常だ。

時間通りに和さんの違法クリニックに到着すると、上半身裸の中年男性が椅子に座っていた。呆けた表情をしている。俺が扉を閉めると、

「おう、来たか。相も変わらず時間通りのツマラナイ男だな！ 偉いぞー」

日本語が分からないなら言っとくけど、褒めてねえぞ。むしろ貶してる。

「定型文な男ですみませんね。それで、今日は何をすればいいんですか？」

「そう焦るなよ。とりあえずコーヒーを入れてきてくれ。今日は酸味押さえたのがいい。かなりキツイの淹れてくれ」

「はいはい。とりあえず淹れてきますわ」

俺は事務室兼とキッチンが一緒になっている奥の妙な部屋に行つて湯を沸かす。水は比熱が高いから時間がかかる。いつも長いのだが、今日は一段と長く感じていた。ゆっくりと湯を落としてから、エアコンが効いた先ほどの部屋に戻る。空気の壁を超えると気持ちいい温度の風を感じた。エアコンを発明した人間は天才に違いない。部屋に戻ると、中年のおっさんはまだ呆けていた。これが普通の状態なのか？ コーヒーを出すと両手でコップを包み、音を立てて啜った。ふと、どこからか生暖かい空気が入り込んでるような気がして、隙間が開いていた扉をちゃんと閉め直した。

「この人は、岡田おかだ保夫やすおさん。免許証の記録だと現在五十三歳。記憶喪失になったようで、ウチを知ってる知り合いの医者が隠れて送ってきた客だ。今回は記憶の復元が目標。ところで、お前は健忘についてどこまで知ってるんだ？」

「人並みには。シヨックとかキツカケで思い出すとかそんな程度です。ってか、記憶喪失なんてアニメみたいな展開ってあるんですね」「アニメも小説も、現実を映すために非現実を創るんだよ。本来的に差はない。面倒だけど説明しとくか」

そう言つて和さんはタバコに火を付ける。フツと最初の煙を吐き出すと、チラツと岡田さんを見て話を再開した。

「俗に記憶喪失つてのは、大体は健忘のことを意味するんだよ。健忘の分類は幾つかあるけど、わかり易いのは前向き健忘と逆向性健忘だ。これらは健忘の対象が将来の事柄か、過去の事柄かって意味だな。今回は逆行性健忘で間違いないだろう。さらに、この人は全

生活史健忘っていう状態にある可能性が極めて高い。この人はある程度の記憶は残ってるんだが、自分についての記憶は殆ど失ってる。この全生活史健忘の症状は一般的に時間経過に伴い回復が見込まれるんだが、前の病院で受けた催眠療法の効果が薄かったためうちに運ばれて来たってワケ。ちょっと知り合いの医者が内緒で連れてきたんだけどな。そこでだ。お前が記憶を覗いて記憶回復のキツカケになる鍵を探して欲しいってことだ。血液検査は前の病院で頼んで感染症も血液型も、大丈夫だった」

「わかりました。じゃあ、そっちの準備お願いします。俺は奥から睡眠薬取ってきますんで」

和さんは岡田さんの血液をあらかじめ先方から手に入れていた。しかし、最近の岡田さんの近況を知る必要が出てくるかもしれないので、注射で採血をしていた。先端の針を血管に鋭角に刺すと、黒くてドロドロの液体が噴き出した。今回も一〇ミリリットルぴったりに。でも、オジサンの血だぜ？ メタボリックでドロドロで、ケンタッキーより濃厚な味がしそつだ。うえっ……気持ち悪っ。

まずは、岡田さんが病院に運ばれてすぐに採った血液を点滴パックに混ぜて俺の体内へと侵入させる。俺は唾を飲んで、睡眠薬を一粒飲む。そしてベッドに横たわると、和さんが「じゃあ、いつてらっしゃい」と微笑んで、頬にキスしてくれた。よし、オツケー。またもう一回ぐらいなら死ぬ覚悟が完成した。点滴パックは萎んでいく。

「ようこそ、いらっしやい」

頭の中の世界で、俺はどこかの会社にいた。小さいビルの4階か5階ぐらいにある四十畳ほどのオフィスでは十四人が働いていた。日はもう既に傾いている。夕刻のオフィスでは社員たちが今日の仕事を切り上げてザワザワと帰りの支度をしていた。

「今日帰りに駅前の大将に飲みに行くぞ！」

金策のために親戚巡りもしたし、銀行に土下座もした。でも、俺に笑って頷いてくれる他人はいなかった。だから、俺が悪い訳じゃないだろう？ そう言ってくれ。

でも、もう終わるんだ。

いや、もう終わったんだ。

短い溜息をつき息を整えて、タバコを吸う。禁煙中だが今回ぐらいは妻も見逃してくれる。オフィスは禁煙だけど、みんなも今回は見逃してくれる。

「あゝあ。終わっちゃったよ。ははは」

思えば、長いもんだったな。さすがにもう疲れたよ。

「さて、仕事も終わったし、休むとするか」

そう言つて、奥の給湯室に向かう。前から準備していたロープを結ぶ。こんなの小説の世界だけだと思つてたのにな。そう言えば、実家の母が昔、「近所にあるスーパーの店長がやった」って言つたな。考え事していると準備が完了した。呆気ないもんだ。そうして椅子の上に登りまた溜息をつく。ふうっ。ふふふははははははははははは 椅子を蹴飛ばして物理法則に身を任せた。

ガタン。無機質な音だけが響き渡った。

なんだ あっち側もこっち側も椅子一つの壁しかないじゃん。

そこから数分は描写できないほど壮絶だった。血管が膨張して切れた血液が全身を伝っていき、視界も真っ赤に染まった。手足が痙攣を始め全身が言うことを聞かなくなり、自分ではなくなった。次第に筋肉が弛緩してくると、脱糞と放尿が起こった。字面では伝えられない程のリアルな異常事態が全身に起こり続けた。

でも、頭の中は先ほどよりも冴えわたっていた。頭の中には「痛い苦しい！ 早く終われ！」しか無かった。カオス状態の頭の中はすべて一つに繋がった。

すると、赤に染まっっていく視界の中で、一人の女の子がこちらを見ている。女の子は必死に叫ぶ。あれは娘だ。奈々だ。奈々が来てくれたんだ。「パパー！」って呼んでくれてる。行かなくちゃ。あ、でもダメなんだ。「ごめんね、奈々。パパはもう返事ができない……」

視界が暗闇に包まれた。いや、無が思考を支配した。

俺は目を覚ました。岡田さんの激烈な体験の記憶から。今回は本当に死ぬかと思うくらい壮絶なものを見てしまった。俺は自分が汗びっしょりなことに気づいた。苦しいものばかりだった。人が言う苦境や逆境つてものがちんけな言葉になり下がった。今の俺には世界に楽しいことなんて皆無だとすら思えた。絶望に次ぐ自殺と後悔隣の部屋で寝ている岡田さんが神のように崇高で、でも恐ろしく人間的な人に見えた。俺は吐き気で涙を流した。

目を拭くとすぐに和さんが入ってきた。

「すごい汗。ジュースでも飲んでシャワー行ってきな」と言つて、タオルを投げてくれた。今の俺には、こんな優しさも人間には温かいものなんだと思えた。ありがとう。

そしてシャワーを浴びて戻ると、和さんが待ちくたびれた顔で待っていた。ワクワクしてソワソワして、今の和さんはまるで誕生日ケーキを待つ少女のような女の子だ。

俺はその状況を話すのを躊躇った。記憶を見る前に死んでもいいかななんて思ったが、やはり死ぬ覚悟なんてできる訳がない。むしろ今は、思いだすことすら拒否していた。純粹な恐怖と苦痛に足が竦んでいた。でも、そんなことは和さんにはお見通しなんだろう。だって、

「わかってるんだから、早く言え」
つて言われたんだから。なんとというサディストだ。まあ、俺はその和さんの傍に自ら望んでいるんだけど。誤解するな！ 決してマゾ

じゃないぞ！ 諦めてありのままを告げる。

「えっと、岡田さんの会社のオフィスから記憶が始まりました。当初、最初の5分位は従業員もいて和気あいあいとした雰囲気だったんですけど、彼一人になると急に混乱し始めました。デスクの上の手形と保険金関連の書類があったのを考えると、金策が上手く行かずに倒産が確定していたようです。他にもデスクの書類を見たところから推測するに、いわゆる『黒字倒産』ってやつですね。大分長い時間、倒産の重圧と影響でもがいていたんですけど、結局その後自殺を図りました。気になった事といえば、しきりに奈々っていう娘さんのことを気にしてました。奈々と公園で遊んだ事とか買い物に行く事とか。かなり溺愛してたんですね。おそらく娘さんと会話させるのが一番いい治療法だと思いますよ」

俺はあらずじを掻い摘んで話した。すると、和さんは、
「そっかそっか。話に出てきた倒産のことだけど、彼は家具の輸出の専門商社を経営してたらしいよ。でも、多くの専門商社って言うのは巨大な総合商社の子会社だったり、関連会社なんだよね。岡田さんも大株主の親会社からちょっと前に送り込まれた経営者だったんだ。円高の影響もあって、就任当初からかなり経営成績も金回りも良かったみたいだけど、ここ二、三年はギリギリの経営だったって。しかも、去年の年末にアメリカの大手証券会社が倒産したじゃん？ それの影響で大口の取引相手だったアメリカの会社が倒れちゃって、売掛金が回収できなくなって資金不足 黒字倒産に至ったらしい。実際は倒産にはなっていないんだけど、親会社主導で事業分割して一部は売却、他は清算に入るらしいよ」

一連の話は大学生の俺にとって教科書の中の世界だった。証券会社の倒産だってテレビの中の世界だ。俺の実感できることは何も無かった。唯一の実感は、岡田さんのリアルな痛みと苦悩だけ。人を苦しめる会社なんて社会には要らない。

そんな机の上の話よりも、今は岡田さんの治療が大事だった。社会の現実問題より、目の前の記憶喪失が現実だ。

「それで、和さん。とりあえず岡田さんと娘さんにゆっくり会話させてみませんか。自殺して意識が飛ぶ間に娘に返事ができない事を嘆いてましたから、効果は期待できると思うんです。完全に素人考えですけど」

「そうだな。素人の直観も侮れないもんだと、今読んでる漫画にも書いてあるし、そうしてみるか。オツケー。娘には私が連絡しておく。奥さんが、意識が回復しても記憶がない岡田さんを娘に会わせたくないらしいんだよ。娘だって傷つくだろうしな。でも、まあ治療のためだと言って説得してみるよ。じゃあ、今日はもうこれで帰っていいよ。また予定が立ったら連絡する」

漫画って……いい加減すぎるよ、和さん。漫画は基本、漫画家の脳内の世界だよ？ わかってる？

「ただいま」

仕事から帰った俺は、足早に家に帰った。途中にあるゲームセンターとか喫茶店とかに脇目もくれずにテクテクと帰って来た。

「おかえり〜」

一人暮らしの家に帰ると、パジャマ姿の春がピザポテトを食べながら出迎えてくれる。俺のピザポテトなだけだな。っていうか、もう完全に自分の家と思いこんでますね。別にいいけど。

「今日なにする〜?」

春は仕事の話なんて聞いてこない。それは俺たちが触れないパンドラの箱だった。無言の壁だった。触れてしまえば何も無い場所に二人の意識や行動が新たな存在を創り出していた。

「今日は疲れたから家でゴロゴロしてる。ってか、もう寝たい」

「えええ。それじゃツマンナイ! じゃあ、イチャイチャしようか!」

なに言ってるんだか。春が結構お堅い奴だつてことはもう分かってる。だから、いちいち相手にもしない。まあ、礼儀として男は期待しなくてはいけない。あくまで礼儀だぞ?

寝転がっている俺は春に向けて両手を広げて、下心の無いだろう笑みを浮かべて、

「おいで」

と言う。だって、春はかわいいし、街を歩いていたら男が振り返るぐらいの女だ。いいじゃん、ちょっとぐらい。かわいいし。

すると予想外なことに春は嬉しそうな猫みたいに俺に飛び込んでくる。「にゃ〜ん」とか言いながら。おいおい、萌えた以外の言葉が見つからないぜ。俺の心臓はマグマのような血液を精一杯に送り出す。バクバクバク!

しばらく俺たちは抱き合っていた。いや、春が俺を布団や枕代わ

りにして寝ていたという方が自然かもしれん。二人して目を合わせないように意識していた。求めあうのではなく、気持を見つめ合うでもなく、存在がそこにあることを確かめるだけの子供じみた刹那だった。ひどく一方的な双方向の想いだった。

ふと春の髪からシャンプーの香いを感じ取った。自分と同じ物を使っているのに、異常に女性的に感じた。気づくと俺の右手は髪を弄っていた。撫でるように包むように。

「今ね私ね、ありがちなんだけど、時が止まればいいと思った。乙女チックな意味じゃなくて、もつと真つ黒な理由でね。ねえ、このまま二人で死ぬまで暮らそうか？」

俺は返事をしなかった。

二人は寄り添っている。心も寄り添っている。それは二つとも違うものだから、二つの間には薄く分厚い壁、高くて低い壁が存在する。本来はある筈のない壁。自分は自分を袋の中に押し込め、他人を他人の籠の中に押し込める。俺は袋の中にいる。

春を無視していると、春と目が合った。とても満足そうな目だった。まるで、俺が無視してくれるものだと思っていたかのように嬉しそうな表情だった。

不意に唇を重ねた。春の唇は柔らかく温かった。俺は目を閉じてその感触に酔った。触れてはいけないような背徳感と、越境したときの新鮮さという味わい。でも、もうそれ以上はいけない。俺は、この生活を意外に気に入っていたから。

「俺、春のこと結構気に入ってるんだぜ？」

「おう！ わかってるぜい！ 私も冬真のこと結構気に入ってるよ。そんな後出しするところも」

ハハハハハハ。声を出して笑った。ハハハハハハ。

変わらないモノなんてない。

八月三〇日。今日は快晴、でも夜はどんより曇り空。

長くて短い夏が終わる。ありふれた表現だけど、そんな言葉が真実的を射ていた。今日も隣には春が寝ていて、世界は勝手に回っている。時間は自分勝手に早歩きで先に行ってしまうし、人の心もいつの間にか変化している。以前はあんなに怖く思えた女が、細くて弱くて愛おしい女の子に思える。こうして世界は変わっていくのだろうか。人の知らぬ間に人も空気も森も海も心も造り変えられてしまうのだろうか。

午後一時半、つまりは早朝に目が覚めるとカーテンの隙間から差し込む光を受けて一気に目が覚めた。昔から疑問に思っていたのだが、なぜ人間は日中に活動をするのだろうか。確かに、街灯も無くて目が利かなくなる時代なら仕方ないと思う。でも、今の時代は特に東京なんかは全然明るい。朝起きる必要性があるのか？ おそらく、人間の人生の中で、赤ん坊の次に自堕落な生活をしている大学生の一員として言わせてもらえば、朝と夜の区別なんてどーでもいい。なんて意味不明な反抗をしながら十五の夜をとくに過ぎた俺はコーヒーを淹れる。今日は三言と緑川と大学で会う予定がある。春も暇そうだから連れてってやるか。

「春起きろ。大学行くぞ。今日課題のレポートを見せて貰うから」「うとうう。ん？ 大学行くの？ わかった。じゃあ、あと三日経ったらねええ……」

はいはい。朝はやっぱり悪魔の様に真黒いコーヒーですね！ どごこの文豪もそうに言っていましたよ。無理矢理に春を起こして準備させる。行きたくない大学でもなぜか単位を気にしてしまう。臆病者だ！ チキンなんだ！

大学の前の喫茶店に着くと窓から緑川が手を挙げて呼んでいる。春は人見知りらしく猫の毛皮を着て、俺の後ろにくっついていた。ガシャ、ギギイ。ドアは相変わらず軋んでいた。マスターとは今は

もう普通の関係に戻っている。あんな会話をしたから正直最近までは気まずい雰囲気もあったのだが、春と二人で来る内に、そんな雰囲気も平気になっていった。むしろ今危険なのは三言だ。春が家に不法侵入して以来話もしていないし、会ってもいない。予想通りに三言はテーブルの端でムスツツとしている。

俺が「よう」と声をかけると、三言は「無視」って言葉で言った。本当にかわいいなあ、もう。

「なに不和、三言と喧嘩でもしてんの？ 夫婦喧嘩はなんとかも食わないっていうんだから早く終わりにしてくれよな」

さすが帰国子女、言いくいことをサラリと言いますね。「外人さん 熟語をいっぱい 知っている」なんて一句読んじやうよ。まあ、できるなら始めっからそうしてるよ！

「この前は悪かったな、三言。本当にごめん。あの時は驚いてテンパっちゃって、あんなキツイ言い方したけど……悪かった！」

三言は窓の外を見つめていた。何を見ているのか、眼球だけが素早く左右に動いていた。そして、急に振り返り春を見つめる。

「それで、その子はなんなのかな」

珍しく、三言がイライラしているのを感じた。三言がイライラするのなんて、入学式後の語学クラスの飲み会以来だ。あの時は俺が酔い潰れて隣の知らない女に抱き付いていたのが悪いんだが。三言を怒らすと意地悪姑のようにグチグチうるさい。絶対コイツA型だ。「えっと、こいつは蒼井春って言って、今事情があつて家に住んでるんだ。緑川はもう、知ってるよな。同じ大学なんだよ。財務会計の授業を取ってるって言うから連れて来たんだ」

「不和、俺には分かってるよ。だって俺は二人の恋のキューピッドだもの」

話をそらすなよ。恋のキューピッドとか死語だしな。「外人さん 死語になつても 分からない」また一句読んじやったよ。それに愛とかそういうのじゃない！三言を見ると、わかりやすく頬を膨らましている。

「愛とかそーいうんじゃなくて、俺にも色々事情があるんだよ。分かって。そういえば、レポート持ってきてくれた？」

少し無理やり話を逸らす。そうして気まずい雰囲気の中、俺たちは課題のレポートと教科書に目を通し始めた。

少し経つと三言が春と話を始めた。

「あたし霧谷三言。よろしく」

「蒼井春です。こちらこそよろしくお願いします」

「よく冬真なんかとずっと一緒にいられるねえ」

と言って、流し目で俺を見てくる。俺は自称几帳面だ。洗濯も洗い物もソツなくこなす。和さんだって、俺を家政婦のようなツマラナイ男だと思っている。それに、別にやましいことなんてしていない。そりゃあ俺だって男の子だもん、我慢してるところはあるが。

「意外に几帳面で掃除とかもマメなんですよ？　いつも私が散らかしたのを片付けてくれますもん。」

春さん、わかっていらっしやる。でも、三言の顔が曇り出す。曇りは夜からのハズなのに。

「そうなんだ。さすがに一カ月も一緒に住んでるとまるで夫婦みたいね。頼りない旦那さんだこと！」

そんな嫌味をいじわる小姑のように言いながら、また流し目でこちらを覗つてくる。なんか知らない内に空気が痛い状況になってる。「夫婦なんかじゃないですよ。でも確かに頼りないオーラは出てますけど、そんな事も無いんですよ？　あたしより先に起きてコーヒーを淹れてくれますし、和さんの所のバイトにも三十分前にはちゃんと出発しますもん。」

もう止めてください。これ以上三言さんを怒らせないでください。三言も大人になってください。三言は明らかに不機嫌そうだ。

「蒼井さんは、今、冬真の家に住んでるんでしょ？　一人暮らしなの？」

ちよつとドキツとした。俺は春の家族や依頼に関係しそんな事は一切聞いたことがない。春も話さない。それでいいのだ。いや、それがいいのだ。核心に触れてはいけない。それこそ処世術。

「いいえ、実家に住んでいましたよ。もう一カ月ほど帰ってませんけど」

三言はズンズン進む。俺と春が二人で作り上げた防御壁なんて、見えもしないし気にもしない。

ズン。

「家族は心配しないの？ いいわね、自由で。あたしの家だったら、二日家をあげたら搜索願が出るわ」

ズンズン。

「家族……家族は心配してると思えますよ。でも、今はこのままがいいんです」

ズンズンズン。

「家なんて父親が頑固で古い人だから、最悪だよ。高校まで門限七時だったし、外泊も基本的にダメだったから。今は、一人暮らしだから反動で遊び歩いてるけどね。家に帰るのなんて着替え取りに帰るくらい」

ズンズンズンズン。

カチツ　俺はタバコを取り出して火を付ける。

「なんか天気崩れそうだな。春そろそろ帰るか？」

もうこれ以上は長居のし過ぎだ。時間は大丈夫でも、もう引き揚げ時だ。雨が来る前に家に帰って洗濯物を取り込もう。俺はまだ全然吸っていないタバコを灰皿に押し付ける。

ジユツ。

逃げるように喫茶店を出ると春が喋り始めた。少し小雨がはらはらと落ちてきていた。ちよつと出るのが遅かった。

「確か冬真だっけ？ あのさ、あたしの依頼はどうなるんだ？ 最近、春が落ち着いちゃってるから、あたしの出番は無いんだけど。」

ああ、あたしは秋。ちなみに春はあたしのことを知らないから。あたしは春のことを知ってるんだけど」

俺は耳を疑った。同じ声、同じ顔、同じ仕草で話をする別人。急に秋として話しかけられて、反応する余裕もなかった。

絶対に二人で触れないようにしてきた二人の空間。そこに秋は躊躇せずに入ってきた。

「春はこの話に触れたがらないんだよ。今のままの生活が続くなら、それでもいい。春はそうに願ってる。ただ、この遊びみたいな生活も永遠じゃないだろ？ 所詮ごっこ遊びだろ？ 冬真も春が死ぬまで一緒に遊んでくれんのか？ そんなの無理だ。だったら、問題の解決を先延ばしにするだけだろ？ もう春が起きるから、ちゃんと考えておいてくれ。あと父親のことはタブーだから言うなよ」

秋は真剣にそう言った。交差点の信号機が青に変わったので俺と秋は足を進めると、急に目を閉じて「じゃあね」と言った。そして春が目を覚まして「うわっ！ 危ない！ ぼくっとしてた！」と、間抜けなことを言う。それが妙に面白かった。春は何も知らない。

それでも、交差点を渡る前の世界と後の世界は全く異なる世界だった。ついさつき起きた出来事は俺の感覚、思考、行動全てに影響を与える。「春、帰りにミスド寄って帰ろうか」なんて言ってみるのも秋に会ったからかもしれない。

だから、夏が終わって秋が来るのに何か運命的なものを感じてしまつのも無理もないことなのだ、と思ってしまう。

秋が来た。

そして、秋が来る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9007g/>

俺と僕と君は他人だ

2010年10月19日13時18分発行